

始



2693

825
MA 88



松下大三郎著

標準漢文法

紀元社藏版



~~531/24~~

自序

- 一 著者は少年の頃から國語漢文殊に其の文法に興味を持つて居つたので、研究といふほどのことではないまでも、且暮文法の問題が頭を支配して居つた。斯くて漢文典として考を一巻にまとめて見ようといふ志を起し、何冊書いて見たか知れないのであるが、自分の満足する様なものは中々出来なかつた。最初から數へると三十幾年になる今日やうく一冊書き上げて世間へ發表して見ようといふ考になつたのが此の標準漢文法である。
- 二 此の書には著者の始めて考へ出した事柄が非常に多い。其れらに多少の取りへがあるかそれとも愚論であるかを敢て天下に訴へようと思ふのである。謙遜なしに言へばまさか全部が愚論である様なことも無さうなものだと思ふ。若し一小部分でも世間に是認せられるならば著者の非常な光榮である。それで新説の處へはなるべく漏さない様に其の項の最初の行の頭へ□を附けて置いた。□の有る處は批評の態度を以て特に注意

される様に願ひたいと思ふ。いけないと決まつた點は重刊の際には必ず一々訂正する考である。

三此の書に引用した例證はなるべく一般の人に讀まれる本から取つた。論語、孟子、春秋左氏傳、史記、列傳、老子、莊子、韓非子を主とし、荀子、墨子、禮記、大學、中庸などからも若干を取り、古いものでは尙書、詩經から取り、また新しいものでは唐宋八家文、文章軌範、唐詩選、三體詩などから取つた。孫引は一句もしてなす。

四著者の日本文法に對する考は別著標準日本文法と稱する一卷に發表してある。漢文を國語と對照する上に於て幸に卑見を徴しようとする方が有らせられるならば一覽を賜はる様に願ひたいと思ふ。

昭和二年十月九日

著者識

標準漢文法目次

第一編 總論

第一章 言語

第一節 言語の本質及び諸相	一
言語 聲音語と文字語 文法語法と字法 國語と國文法 文語と口語 標準語と特殊語 漢文は支那語並に日本語である 日本人の漢文は日本語 支那人の漢文も日本人には日本語 漢文の日本讀の價值 外國語の不可解	
第二節 言語の構成	二
思念構成の二階段	二
説話構成の三階段	七
斷句	七
目次	一

單斷句と連斷句 單流斷句と並流斷句
 詞……………二六
 原辭……………三〇

第二章 文法學

第一節 文法學の本質及び諸相……………三一
學問 科學 文法學 記述文法學 理論文法學
 第二節 文法學の體系……………三五
 文法學の範圍……………三五
 文法學の部門……………三七
 總論と各論……………三六
總論 各論 文章論の不可
 詞の單獨論……………四〇
 詞の相關論……………四七

第二編 詞の單獨論

第一章 詞の本姓

第一節 品詞……………五一
詞の本姓と詞類
 名詞……………五五
連詞的名詞 代名詞 事物の概念
 動詞……………六一
連詞的動詞 形容詞
 副體詞(Adjective)……………六五
副詞
接續詞 前置詞 冒稱副詞
 感動詞……………七一
 目次……………

複性詞	三
變態品詞	六
六品詞の分類的精神	六

第二節 名詞の小分

名詞の四種	五
-------	---

本名詞 代名詞 不定名詞 形式名詞 詞の二大別と實字虚字
代名詞獨立の不可

本名詞の小分其一	九〇
----------	----

普通名詞 固有名詞 模型名詞

本名詞の小分其二	九三
----------	----

絶對名詞 相對名詞

代名詞の小分	九六
--------	----

人稱代名詞	九六
-------	----

位置代名詞	九九
-------	----

近稱 遠稱 中稱 日本語との比較

種々の代名詞	一〇七
--------	-----

不定名詞の小分	一〇八
---------	-----

形式名詞の小分	一一一
---------	-----

單純形式名詞	一一一
--------	-----

者 等 與及暨

寄生形式名詞	一一〇
--------	-----

之 焉 諸

第三節 動詞の小分	一一六
-----------	-----

動詞の四種	一一六
-------	-----

本動詞 代動詞 不定動詞 形式動詞

本動詞の小分	一二三
--------	-----

動作動詞と形容動詞	一二三
-----------	-----

記號動詞象形動詞と模型動詞	一二五
---------------	-----

分主性動詞と合主性動詞……………一三三

歸著性動詞と非歸著性動詞……………一三五

他動性動詞と自動性動詞……………一六七

 他動の四義 自然的他動と意志的他動 自動態と他動態

依據性動詞と非依據性動詞……………一七九

生産性動詞と非生産性動詞……………一七九

 「謂、云、言、曰」等の區別

形式動詞の小分……………一八五

單純形式動詞……………一八六

 乎 於、于、以、自 云 「來得、盡了」の類

歸著形式動詞……………一九一

 有 無 莫 微 曰、爲、作 爲 如若、猶 足 可 當、應、合 宜 暇

 遠、皇 勝 庶、庶幾 見 遇、遭 須 能 得 被 莫、無、勿、毋、罔 爲

修飾形式動詞……………一九七

得 使 俾 遣 教 令

被修飾形式動詞……………二三四

寄生形式動詞……………二三六

第四節 副體詞の小分……………二四一

 本副體詞……………二四一

 代副體詞……………二四三

 近稱 遠稱 中稱

 不定副體詞……………二五三

 形式副體詞……………二五三

 「之」の第一用法 「之」の第二用法 「之」の第三用法

第五節 副詞の小分……………二六一

 尋常副詞と連名性副詞……………二六一

 修飾性副詞と補充性副詞……………二六三

 副詞の四種……………二六七

目次……………二六七

本副詞……………二六七

代副詞……………二七〇
 自躬 夫 其 是 惟維、伊、時、茲、侯、之、厥 此、斯、茲、爰、曰、云、言、越、于、安、案
 焉

不定副詞……………二八〇
 何 奚 胡 曷 害 詎 假 侯 惡 安 焉 烏 奈何 那
 寧 庸 豈 或「獨」の辨

形式副詞……………二九七

接續詞……………二九九
 「以」の用法 「則」の用法 「即、乃、便、輒、載、會、適」の用法 「亦」の用法 「又、還、有
 復」の用法 「且、將」の用法 「若、如」の用法

前置詞……………三〇六
 「於、于」の用法 「以」の用法 「爲、比」の用法 「自由、從、道」の用法 「方、比」の用
 法 「與、及、暨」の用法 「每、舉」の用法

修飾形式副詞……………三〇六

20

第六節 感動詞の小分……………三六三

實質感動詞……………三六三

嗚呼 於 於戲 於乎 惡 嗚 呼 于嗟 于嗟乎 于摧 烏乎
 已 烏 孛 呼 意 噫 噫嘻 猗嘻 猗嗟 猗與 唉 懿 嘻
 噫 緊 嗟 嗟々 嗟呼 嗟苦 嗟夫 吞 都 咄 叱 唯々

形式感動詞……………三七七

「也」の用法 「矣」の用法 「焉」の用法 「乎」の用法 「哉」の用法 「與、歟」の用
 法 「邪、耶」の用法 「夫」の用法 「耳、爾、已」の用法 「兮」の用法 極古い形
 式感動詞

第七節 複性詞の小分……………四〇一

第一種の複性詞……………四〇三

「諧」の性質 「盍、盍」の性質 「游」の性質

第二種の複性詞……………四〇九

所の副詞化 「所謂、所有」の訓 「所以、所爲、所自、所由、所與」の用法

第八節

變態品詞 四三三

「所」の單用 「所」と「處」 「所」と被動 依「所乎」の辨
單性詞と複性詞 變態の單性詞 詞の他詞に對する效力 變態詞
の他詞に對する效力 變態詞の種別

變態名詞 四二六

動詞性名詞 四二六

副詞性名詞 四二六

名詞性再名詞 四二九

變態動詞 四三〇

名詞性動詞 四三一

副詞性動詞 四三一

本副詞性動詞 四三一

前置詞性動詞 四四三

「以」の用法 「於」の用法 「乎」の用法 「爲」の用法 「自」の用法 「與」の用法

動詞性再動詞 四六七
變態副詞 四七〇
複雜變態詞 四七〇

前置詞性動詞性名詞 於以爲與 名詞性動詞性名詞 動詞性再動詞性名詞

第二章 詞の副性

第一節 名詞の副性 四七五

名詞の相 四七六

相對態と絶對態 四七六

實質態と形式態 四七七

對等的形式態

表現の相 四八〇

表示態 四八〇

目次

敘述態……………四八一

分主態と合主態 肯定態と否定態 叙述態の理論……………四八八

指示態……………四九一

喚呼態……………四九二

名詞の格……………四九六

表示態名詞の格……………四九九

一般の名詞の格 「之、焉」の格……………五〇二

敘述態名詞の格……………五〇五

指示態名詞の格……………五〇六

喚呼態名詞の格……………五〇七

第二節 動詞の副性……………五〇七

動詞の相……………五〇七

分主態と合主態……………五〇七

歸著態と非歸著態……………五〇九

實質態と形式態……………五一一

對等的形式態

原動態と使被動態……………五一四

使動態……………五二七

被動態……………五二九

準被動 日本語との比較

比較の相……………五二八

肯定態と否定態……………五三〇

動詞の格……………五三四

一般動詞の格……………五三四

獨立的用法 連體的用法 修用的用法 客體的用法 實質的用法

特殊動詞の格……………五四三

「而」の格 「微」の格 「使、俾、令、教、遣、得」の格

第三節 副詞、副體詞、感動詞の副性……………五五〇

目次

副詞の副性	五五〇
副詞の相 副詞の格	
副體詞の副性	五五三
副體詞の相 副體詞の格	
感動詞の副性	五五五

第三編 詞の相關論

第一章 連詞の成分

第一節 從屬統率の關係	五五七
第二節 五種の成分關係	五六一
主體關係 客體關係 實質關係 修用關係 連體關係 從來の説	
成分關係の層	

第三節 成分關係分類の理論	五六九
---------------	-----

第二章 成分の統合

第一節 主語と敘述語	五七〇
主體關係の連詞	五七〇
主語敘述語の代表部 准主語 主語と題目語	
主語の材料	五七九
敘述語の材料	五八一
敘述的詞の分主態	五八三
敘述的詞の合主態	五九〇
特殊性の合主化 一般性の合主化	
第二節 客語と歸著語	六〇八
客體關係の連詞	六〇八

客語の材料……………六三

歸著語の材料……………六九

動詞の歸著化……………六一

動詞前置詞の非歸著化……………六六

 特殊性非歸著化 一般性非歸著化

第三節 實質語と形式語……………六四七

實質關係の連詞……………六四七

 尋常實質關係 對等實質關係

尋常實質語及び形式語の材料……………六五一

 尋常實質語 尋常形式語

單純形式名詞……………六五四

 者 等 與、及、暨

單純形式動詞……………六五七

 乎、於、于 以、自、與 云 來、得、盡、了

單純形式副體詞……………六五五

形式感動詞……………六五五

對等實質語及び形式語の材料……………六五七

第四節 修用語と被修用語……………六七〇

修用關係の連詞……………六七〇

修用關係の種別……………六七三

平說的修用語……………六七四

提示的修用語……………六七四

題目語……………六七七

單純提示語……………六八一

斷句的修用語……………六八二

平說的修用語の材料……………六八四

表示態名詞……………六八四

敘述態名詞……………六八八

動詞……………六八九

副詞……………六九〇

提示的修用語の材料……………六九二

主體の提示語……………六九二

 〔況〕の訓

 客體の提示語……………六九九

 直接客體の提示語……………七〇一

 〔何如〕の二種と〔如何〕

 間接客體の提示語……………七二三

 實質の提示語……………七二〇

 屬性の提示語……………七二三

 判斷の提示語……………七二六

 斷句的修用語の材料……………七二九

 實質感動詞……………七二九

喚呼態名詞……………七二二

指示態名詞……………七二三

敘述態名詞……………七二三

動詞……………七三五

 接續性從屬 喚呼性從屬 感動性從屬 歸著性從屬 「目」の訓法
 歸著性從屬の語の訓

修用語と斷句の種類……………七四四

 有題斷句と無題斷句……………七四四

 單斷句と連斷句……………七四六

 複文論

第五節 連體語と被連體語……………七五〇

 連體關係の連詞……………七五〇

 修飾的連體語及び被連體語の材料……………七五三

 相對的連體語及び被連體語の材料……………七五七

主體的連體語及び被連體語の材料……………七〇

其 厥 之

第三章 成分の排列

第一節 成分の直接關係……………七五

意識流の方向……………七五

正置法……………七五

一般の正置法……………七五

客體關係の一般的排置……………七五

客體關係の特殊的排置……………七五

詞語より成る客語の排置 代名詞形式名詞の排置 特殊排置法の

發生 兩者意義の相違

倒置法……………七九

主語、敘述語の倒置……………七〇

修用語、被修用語の倒置……………七三

客語倒置不能の救済……………七四

第二節 成分の間接關係……………七六

統合關係の親疎……………七六

複層の客語……………七六

他動兼依據の動詞……………七六

依據兼他動の動詞……………八三

動詞の性質の鑑別 兩様の動詞

他動兼生産の動詞……………八〇九

依據兼生産の動詞……………八〇九

依據性の再依據……………八一〇

場所の客語……………八二

動詞上の複層從屬語……………八二四

主語と准主語……………八一六

目次

主體の語と修用語……………八七

概念の新舊と成分の排置……………八八

客語と客語……………八九

客語と歸著語……………八六

標準漢文法目次終

標準漢文法

松下大三郎著



第一編 總論

第一章 言語

第一節 言語の本質及び諸相

の演説も皆一つの言語であるが、山河往來焉矣などの様な極短いものも矢張それぞれ一つの言語である。言語は聲音を記號とするが、其の目的は思念の表示に在る。されば言語の外は聲音であつて其の内面は思念である。

聲音語と文字語 言語は聲音を以て思念を表はすものであるが、更に之を文字

第一編 第一章 第一節 言語の本質及び諸相

に表はすことが出来る。聲音を以て思念を表はしたまゝの第一次的の言語を聲音語と謂ひ、之を文字に表はした第二次的の言語を文字語と謂ふ。文章は勿論文字語であるが、まだ文章を成さない文字でも其れが言語を表示してゐるならば例へば「山河矣」馬などの様なものは、一つの文字語である。

言語を表はした文字は、之を文字として觀れば文字であつて言語ではない。唯之を言語の代表者と觀之を言語を表はした文字と觀ずに文字に表はされた言語と觀た場合に文字語なのである。

文法 言語が多數の人に共通に思想を通じ得る所以は、其の構成に同一體系に統一された一定の法則があるからである。此の言語の構成法則を文法といふ。文法に内面的法則と外面的法則との二面がある。内面的法則は言語の内面なる思念に關する法則である。思念が聲音に表はされる上に於ての法則である。例へば名詞は事物を表はすとか、主語は作用の主體を表はすとかいふ様な類である。此れは世界人類に共通普遍な極めて一般的なものであらなければならぬ。外面的法則とは言語の外面たる聲音の法則である。聲音の思念を表はす上に於け

る法則である。例へば主語と客語とは日本語では「風が花を散らす」といふ様に助辭「が」を附して區別するが漢文では「風散花」といふ様に作用の語に對する位置に由つて區別されるといふ様な類である。此れはその國語に由つて各違ふ。

語法と字法 言語に聲音語、文字語の二つの場合がある以上、文法にも聲音語文法、文字語文法の二つの場合がある譯である。併し文字語は聲音語が文字に表はされただけであつて元々別のものではないのであるから、文字語文法とても聲音語文法と別のもてはなく、唯聲音語文法へ言語を文字に表はす法則を加へたものたるに過ぎない。此の言語を文字に表はす法則を字法と名づける。そこで聲音語文法を語法と名づけ、語法と字法とを合せて文法と名づけるのが至當であると思はれるが、一般の習慣では文法といふ語は語法と同義にも用ゐられる。

國語と國文法 或る特殊の文法に由つて支配される言語を國語といひ、その文法を國文法といふ。例へば日本語、支那語、英語などは國語で、日本文法、支那文法、英文法などは國文法である。そうして言語といふのは特殊の國語に拘らず一般に言ふのであつて、如何なる國語も皆言語であるが、實際に於て言語は國語としての

み存在するのである。

文語と口語 日本や支那の國語には文語と口語と二種の態が有る。歐米の諸國語では二者の區別が著しくない。日本や支那でも上古は文語口語の別が無かつたのであるが、同じ國語が一方では口に發せられて自由な變遷をするのに、一方では文字に寫されて不自由な變遷をするので、竟に今日の様な二態を成すことに爲つたのである。

標準語と特殊語 文語にも口語にも標準語と特殊語とが有る。今日支那では文語は古文を以て第一標準語とし、時文を第二標準語とし、口語では北京官話を第一標準語とし、南方官話を第二標準語としてゐる。日本で漢文と稱するものは多くの場合古文を指すのである。

漢文は支那語並に日本語である □漢文を單に外國語である、支那語であると思ふのは非常な誤である。私は漢文には支那語としてと日本語としてとの兩面が有ると思ふ。このことを論ずる爲には先づ日本人の漢文と支那人の漢文との二段に分けていふが善いと思ふ。

日本人の漢文は日本語 □日本人は漢文を支那語として讀まずに日本語に直して讀む。漢文を作る場合にも心中に日本文を作りつゝ之を文字に書き表はすのである。その出來上つた漢文は支那人が讀めば漢文であるが、日本人が讀めば文字が顛倒してゐて假名が無いだけで何處までも日本語である。その漢文らしい點は目で見た感じが漢文と同じだと云ふだけで、讀む際に發する言語が日本語であるとは勿論、默讀する際に喚起される語音の心象も、作る際に喚起される語音の心象も、悉く日本語音の心象である。何處に漢文たる點があらうか。漢文としての價値は、支那人が是認するであらうといふ豫想價値に止るのである。日本人の作つた漢文は何處までも日本語であつて漢文ではない。日本語を作つて其れを文字に表はし、讀む際にも日本語で讀むのに、其れを目で見たまゝの外形からのみ觀て、日本語ではない漢文だと云ふならば、吾妻鏡流の文章は何であるか。勿論支那人には通じないから漢文ではなく、文字が顛倒してゐるから日本語ではなく、約り何處の國語でもないといふことになる。そんな文章が有る筈は無い。それを思へば日本人の作つた漢文は文字の顛倒した日本文であるといふことが分る

答である。日本の文にはその字法が二種ある。直置體と顛倒體とである。顛倒體の中に漢文と合致するものと合致しないものとの二種がある。日本文學史に於ても日本人の漢文は之を等閑に附すべきでないと思ふ。私はこのことを明治二十八年の秋或る雑誌に論じたことがあつたが、何等の反響を聞かなかつた。

支那人の漢文も日本人には日本語 □然らば支那人の漢文は單に支那語たるのみで日本語たる場合は全然ないかといふと、これも私はそう思はない。支那人が讀めば支那文であるが、日本人が讀めば之を支那語で讀まずに日本語で讀むのであるから矢張日本語だと思ふ。作者が支那人であらうが日本人であらうが、讀む人が日本語で讀めばその讀む人に對しては相對的に日本語である。作つた人の作る時の心意状態などは讀む人に對しては問題ではない。讀んだ時の讀み方がその日本語か支那語かを決めるのである。蟲が木を齧んだ跡でも其れが立派に和歌とし讀めれば其れは讀む人に對して日本語である。同時に日本人の漢文でも支那人が讀めば讀む者に對しては支那語であり支那人の漢文でも顛倒して讀む日本人に對しては日本語であらなければならぬ。凡そ文を讀むといふこ

とは其れは一種の作文である。再現的に作るのである。目に映る文字に導かれつゝ知らず識らず文を作るのである。その作られたものが日本語である場合は其の文章は日本語なのである。されば文字語は之を絶對的に日本語である支那語であると云ふことは出来ない。作つた人又は讀む人に對して相對的に日本語である支那語であると言へるだけである。

□支那人の手に成つた經書、子類、正史、詩文等澤山の漢文は日本人に愛讀される。此等皆讀者に對して日本語である。そうして此等の思想がどれだけ日本人の思想に影響してゐるか其れは非常なものである。日本の文學史は唯之を影響と考へてはならない。日本語に表はされた文學が日本文學であるならば、此等は皆日本文學である。作者が支那人であらうが日本人であらうが其れが日本文學たる點に於ては變りはない。但し源氏物語や大平記の類ならばその作られた時代を文學史上の時代として取扱ふのであるが、易や詩經を、その作られた時代を以てして直に日本文學史上に於ける時代とすることは出来ない。何となれば日本文學としては日本人が始めて讀み始めた時代が日本文學史上の時代なのであつて、日

實は
思ひ
た

本人の讀まなかつた以前は日本文學には關係のないことである。

□日本人は漢文を日本語にして漢文を日本語に同化して仕舞つた。此れ世界文化史上驚くべき大事業である。日本人の祖先の偉大であつた點はこゝにも十分に認められる。英文などもそうなるべき筈であつた。然るに近代人は其所へ氣附かずに直譯を捨て、意譯に走ることゝなつた。明治の初年に企てられた直譯は今日では蕩然として地を掃ひ纔に直譯的句調の若干を現代文に傳へるに過ぎなくなつたことは誠に惜むべきことである。

漢文の日本讀の價值 □日本人は漢文を日本語にする。それで漢文直譯體なる一種の文體を作つた。千年以上も此の直譯に慣れて來た日本人は漢文を讀むこと普通の日本語を讀むのと大差なく、訓點さへ有れば餘り漢文を讀み慣れない人でも能く讀むのである。それは漢文には慣れなくても漢文直譯體には慣れてゐるからである。そうして漢文の趣味を味ふ能力は支那人と殆ど變りはない。支那人の九十九パーセント位には行くかと思はれる。これは實に二千年間の歴史が有るからである。

□併し漢文を書き下しにしては原文の趣はなくなる。往年國譯ものが澤山出版されたが、國譯にして仕舞ふと漢文直譯體の文といふものは誠に約らないものになる。其れは原文のまゝであれば漢文の長所が發揮されるが、國譯にすると其れがなくなるからである。漢文の長所は文字の排列に在る。意味が分る様に爲す爲に吾々は顛倒したり、訓讀したり、助辭を附けたりして讀むが、それは眼の方には關係しない。讀方は日本語であつても眼で見ても何處までも漢文である。讀んで意味が分り、觀て漢文の趣が分る。實に巧妙なものである。

□私は今、一つの喩を引く。茲に西洋物の活動劇が有るとする。固より西洋の活動役者が演じたものであるが、辯士は非常な名人で、日本語でやる。所作と言語とがきちんと合ふ。觀客は辯士の有ることを忘れ活動映畫であることを忘れて通常の演劇の様に思ふ。これが即ち漢文の日本語である。活動寫眞の映畫は舶來物で漢文だ。辯士の聲色は日本語である。

この活動寫眞を英國でやり英國の辯士が英語で聲色を使ひ、そうして英人が見物する。それは漢文を支那人が讀むものである。この場合に前の日本人觀客と此

の英人観客との活動劇に對する趣味の感受力にどれだけの差が有るか。殆ど差はなからうと思ふ。

□然るに近時漢文を棒讀にしようといふ説が有る。中學の漢文科でも棒讀にするが善いといふ。私は此れは非常な誤と思ふ。漢文は棒讀にしては味や氣分が分るものではない。前の活動映畫の辯士の聲色を英語にしようといふのと同じである。五年や十年習つた英語の力ではその活動劇の趣味がよく分る筈がない。

外國語の不可解 日本人にも外國語の達者な人は有るであらう。併し其れは意味が分るだけで眞の味までは分るものではない。凡そ人の能力には限が有る。一人で眞に二國語に通ずる人はない。二國語に同じ様に通じて甲乙のない人が有つたならば、其れは兩方とも善くは分らない人である。日本語が十分分る間は外國語が出来ると思つても本國人の様には行かない。漢文の棒讀でもそうである。支那語をやる人の中には赤壁賦などを支那讀にして通がる者が有るが、それは支那讀で味が分るのではなくて、既に日本讀で十分分つて居る漢文を支那讀にして見るだけである。突然始めて見た漢文を支那讀にしては到底、その眞の味は

分らない。だから日本人は漢文を讀むのに棒讀にしてはならない。喩へば見えの爲に満足な齒を抜いて金齒を入れたり、家庭をよく治める立派な夫人を現代的でないと思つて離縁して斷髮婦人か何かを引張り込むよりも馬鹿げてゐる。

第二節 言語の構成

思念構成の二階段

言語の内面は思念である。思念の構成には二つの階段が有る。其れは一つは觀念で一つは斷定である。

觀念 刺戟に由つて生ずるものは知覺である。知覺は刺戟が去れば直ぐに消滅する。例へば物を視れば物が見えて物の視覺を生ずるが、目を閉ぢれば見えなくなる。併し知覺は刺戟が去つても長く心意に保持される場合がある。之を觀念と云ふ。

觀念が單に知覺に由つて生じたままであればその間に分解作用が行はれて居ら

ない。物の本體も屬性も作用も一處になつてゐる。さういふ觀念は抽象されな
いもので、其の對象は唯一つである。例へば或る一つの物を見ても其れが何であ
るかといふ様なことを全然考へないとしたならば、その觀念はその物を對象とす
るだけで他物に對する普遍性がない。さういふ觀念を具體的特殊的觀念といひ
又單に觀念といふ。

觀念は分解されて其の中の或る點だけが一つの觀念となり他物の同様なる點と
共通性を持つ場合がある。例へば別々に多數の物を見て別々の特殊的觀念が生
じて、其の物が皆白い物であつたならば各の觀念には白いといふ共通點が有る。
この共通點だけが一つの觀念となれば、この觀念は今まで見た物を對象とするの
みならず別の白い物をも對象とすることが出来、遂には架空の白を對象とするこ
とが出来る。さういふ抽象的普遍的の觀念を概念といふ。通常觀念といふ時は
まだ概念とならない觀念を指す場合が多いが、概念も勿論觀念の一種である。

概念は分解されて二概念となると同時にその二概念は同一意識内に統合されて
一概念となる。例へば「母」といふ概念は「女親」の二概念に分解されるが、この二概念
は一方が一方に従屬し一方が一方を統率する關係を以て統合されて「女の親」とい
ふ一概念となる。「女の親」は一概念ではあるが内部に區別が有つて二概念が相
係してゐる。さういふのを統合概念と云ひ、最初の「母」「女親」の様なのを單概念とい
ふ。統合概念は必しも單概念と單概念との統合だけではなく、單概念と統合概念
との統合もあり、統合概念と統合概念との統合も有るのである。

斷定 斷定は事柄に對する主觀の了解である。

斷定はその了解され方に由つて思惟性斷定と直觀性斷定との二つに分たれる。
思惟性斷定は判定作用に由る了解である。事柄に對する觀念が二つに分解され
て一は判斷の對象の觀念となり、一は判斷そのものゝ觀念となつて、この二つが同
一意識内に統覺される。この作用が判定作用でその作用の結果が思惟性斷定で
ある。

例へば人が花を觀たとすると、花の色や形や美しさや、さういふ種々の屬性は一處
になつて人の心意に認識されて一つの觀念となる。この觀念が分解されて「此の
花は」といふ概念と「美しい」といふ概念との二概念になつたとする。前者は判斷の

對象で後者は判断そのものである。この二概念が統覺されて「此の花は美しい」といふ一つの断定となる。この断定は思惟性断定である。此の例は判断の對象も判断も兩方とも概念になつた場合であつて之を有題的思惟性断定といふ。

又判断の對象が概念とならずに判断だけが概念となる場合がある。例へば時計を見て「やあ、もう十二時だ」と考へたとする。判断の對象は現在の時刻の觀念であるが、それは概念になつてゐない。人が公園へ行つて「綺麗な花が咲いてゐるなあ」と云つたとする。「花がは「咲く」といふ動作の主であつてこれは判定概念の一部であるだけで判断の對象ではない。判断の對象は現在見た所の直観であつてまだ概念になつてゐない。こゝにいふ様なのは無題的思惟性断定である。

直観性断定は判定作用に由らずに直観的に了解された断定である。事柄に對する觀念が直観のまゝであつて判断の對象と判断そのものにと分解されないものである。

例へば「掏摸兒を追つかけて「泥棒々々」と叫び、渴して「水々」と叫ぶ様な類だ。これらは概念にはなつてゐるから之を概念的直観性断定といふ。

又物に驚いて「あら」と叫び、失望して「あゝあ」と嘆息したとする。こゝにいふのはその直観のまゝの觀念はあるが、其れが概念となつてゐないから之を非概念的直観性断定とする。

□断定は又その觀念流の系数に由つて之を單流断定、並流断定の二つに分ける。單流断定とは一系の觀念流より成る断定である。思惟性断定に就て言へば、判定の對象が一つであつて判定そのものも一つであるならば對象觀念から判定觀念へ流れる觀念流は唯一系である。例へば「此の花は美しい」でも「月が出た」でも「さうだ」。直観性断定に就て言へば「父よ」「君よ」「あゝ」といふ類がさうだ。

並流断定は二系以上の觀念流が一系に統一されてゐるものである。思惟性断定に就て言へば、判定の對象と判定そのものとの一方又は雙方が二つ以上有つた場合にさうだ。例へば

1 周公孔子聖人也。

2 滅秦者秦也、非六國也。

3 蘇秦張儀小人也、非君子也。

などは並流断定だ。直観性断定に於ても二つの觀念が其の實質に於て相從屬しないものより成るときは並流だ。例へば「李張二君」と呼びかけたやうな場合はそ
うだ。

断定の成分は觀念(概念を合む)である。如何なる断定も皆必ず觀念から成立する。成分と云ふと必ず二つ以上の様に聞えるかも知れないが、必ずしも二つ以上とは限らない。時には一つの成分から成立つこともある。例へば驚いて「おや」と叫んだとすると「おや」は一つの直観性断定であるがその成分は矢張「おや」といふ觀念である。

断定は觀念から成立するがその断定も亦之を客觀的に取扱へば一つの概念である。例へば「友人歸故郷」は一つの断定である。併し

我送「友人歸故郷」

といふ時の「友人歸故郷」は一つの概念(統合概念)である。断定は之を主觀的に観て断定であるのである。その了解が断定なのである。その了解の目的物或はその了解の對象は觀念或は概念である。

説話構成の三階段

□言語が説話を構成するには必ず三つの階段を踏む。三つの階段とは原辭と詞と斷句とである。説話は必ず斷句でなければならぬ。斷句は必ず詞から成り詞は必ず原辭から成る。言語は最初原辭といふ階段に在り、次に詞といふ階段に移り、次に斷句といふ階段を踏み、茲に始めて説話を成すのである。

斷句

斷句(Sentence)は説話の單位であつて断定を表示するものである。即ち或る事柄に對する主觀の了解を表はすものである。第四頁に断定の所に擧げた

此の花は美しい。

綺麗な花が咲いてゐるなあ。

泥棒!

あら!

の様なものはそれぞれその断定を表はすものであるから皆断句である。

断句は必しも主語を有するものではない。世の文法書は多く断句を文章と名づけ之を定義して文章とは主語と述語とを有し意義の終止してゐるものであると云ひ、主語と述語とを文章の必須成分としてゐるが、其れは誤であらうと思ふ。断句(文章)の中には主語の無いものが澤山有る。例へば

是歳之春雨麥於岐山之陽。蘇東坡喜雨亭記

太行之陽有盤谷。韓愈送李愿序

夫以子之不遇時。同送董邵南序

其然豈其然乎。論語憲問

然。孟子告子上

母。論語雍也

唯。同里仁

などは皆主語が無い。これを断句でないと誰が云ひ得ようか。殊に主観的断句に在つては絶対に主語述語の有るべきものでない。断句は必ず主語を要すると

思ふことは西洋文典の直譯であるし、西洋の學者がそう思つたのは彼等の國語に於て断句に主語の無い場合が少ないからである。

断句は必ず短いと限らない。断句にも随分長いものがある。例へば

鄉使二世有庸主之行而任忠賢臣主一心而憂海內之患縞素而正先帝之過裂地分民以封功臣之後建國立君以禮天下虛囹圄而免刑戮除去收帑汚穢之罪使各反其鄉里發倉廩散財帑以賑孤獨窮困之士輕賦少事以佐百姓之急約法省刑以持其後使天下之人皆得自新更節修行各慎其身塞萬民之望而以威德與天下天下集矣。賈誼過秦論

などは百三十五字有る一つの断句である。長い様だが結局は、鄉使二世如此天下集矣といふ一断句なのである。

断句を世間では文或は文章と謂つてゐるが、それは不適當な用語だらうと思ふ。文或は文章とは元來、祭十二郎文とか岳陽樓記とか云ふ様な、一つの體系に内容の統一されたものを指す語であつて断句を指すものではない。「月出」の二字を一つの文章だと言つたらば始めて聞く人は了解が出来まいと思ふ。断句といふ意義

を表はすには本來「句」と語が有るのである。字典に據れば句とは意義の盡くる處である。即ち斷句のことである。併し句といふ語は悪用されてまだ斷句にならないもの、例へば歌の一句なども指すやうになつたから、斷句を句といふと誤解され易い。そこで私は斷の字を加へて斷句といふ。斷れた句と解しても斷定の句と解しても善し。

單斷句と連斷句

□ 斷句に單斷句、連斷句の二種がある。

單斷句 全く單一なる一斷句であつて、分けて二つ以上の斷句にすることの出來ないものを單斷句といふ。例へば、

- 1 世有伯樂然後有千里馬。韓愈雜說四勢頭
- 2 千里馬常有而伯樂不常有。同次
- 3 故雖有名馬祇辱於奴隸人之手駢死於槽枥之間不以千里稱也。同次
- 4 馬之千里者一食或盡粟一石。同次

- 5 食馬者不知其能千里而食也。同次
- 6 是馬也雖有千里之能食不飽力不足才美不外見且欲與常馬等不可得。同次
- 7 安求其能千里也。同次
- 8 策之不以其道食之不能盡其材鳴之不能通其意。同次
- 9 執策而臨之曰天下無良馬。同次
- 10 嗚呼其真無馬邪。同次
- 11 其真不識馬邪。同次

などは各一つの單斷句である。

單斷句は其の表はす斷定の種類の如何に因つて次の如く分たれる。



連斷句 連斷句は二つ以上の斷句が相關係して一斷句となつたもので、其の内

部から言へば二つ以上の断句に分解し得べきものである。例へば

敢問、何如斯可謂仁矣。孟子盡心下

の様なのが連断句である。全體が一つの断句であるが其の内部に於ては——も一つの断句であり、——も一つの断句であつて二断句に分解される。しかし外部から観れば——と——と合體して一断句である。何となれば——は——に従屬し——が全體を代表するからである。——だけに就いて言へば失禮ながら尋ねしますといふ意であつて自己としては立派に意味が終止してゐる。然るに其れが——に従屬するといふのは——は——と同じ事柄をあらはすものであるからである。——は問そのものであるが——は——の間であることを表示する。——が店ならば——は看板である。——が手紙ならば——は表書である。手紙と表書とで一通の手紙である。二通ではない。

不識舜不知象之將殺己與。孟子萬章上

否、此非君子之言齊東野人之語也。同

天下殆哉岌々乎。同

惜乎、吾見其進也未見其止也。論語子罕

已矣、將軍勿復言。史記白起王翳列傳

嗟乎、爲法之敝一至此哉。同商君列傳

なども連断句である。——は自己としては一断句であるが、——の事柄に就いての表示であるために従屬化する。私は普通の日本文典といふ單文複文重文などといふ區別は要らないことだと思ふ。唯この單断句連断句及び次にいふ單流並流の別を必要と思ふ。此の問題に關しては尙第七六—七五頁に詳論する。

單流断句と並流断句

□断句に單流断句と並流断句との二種が有る。

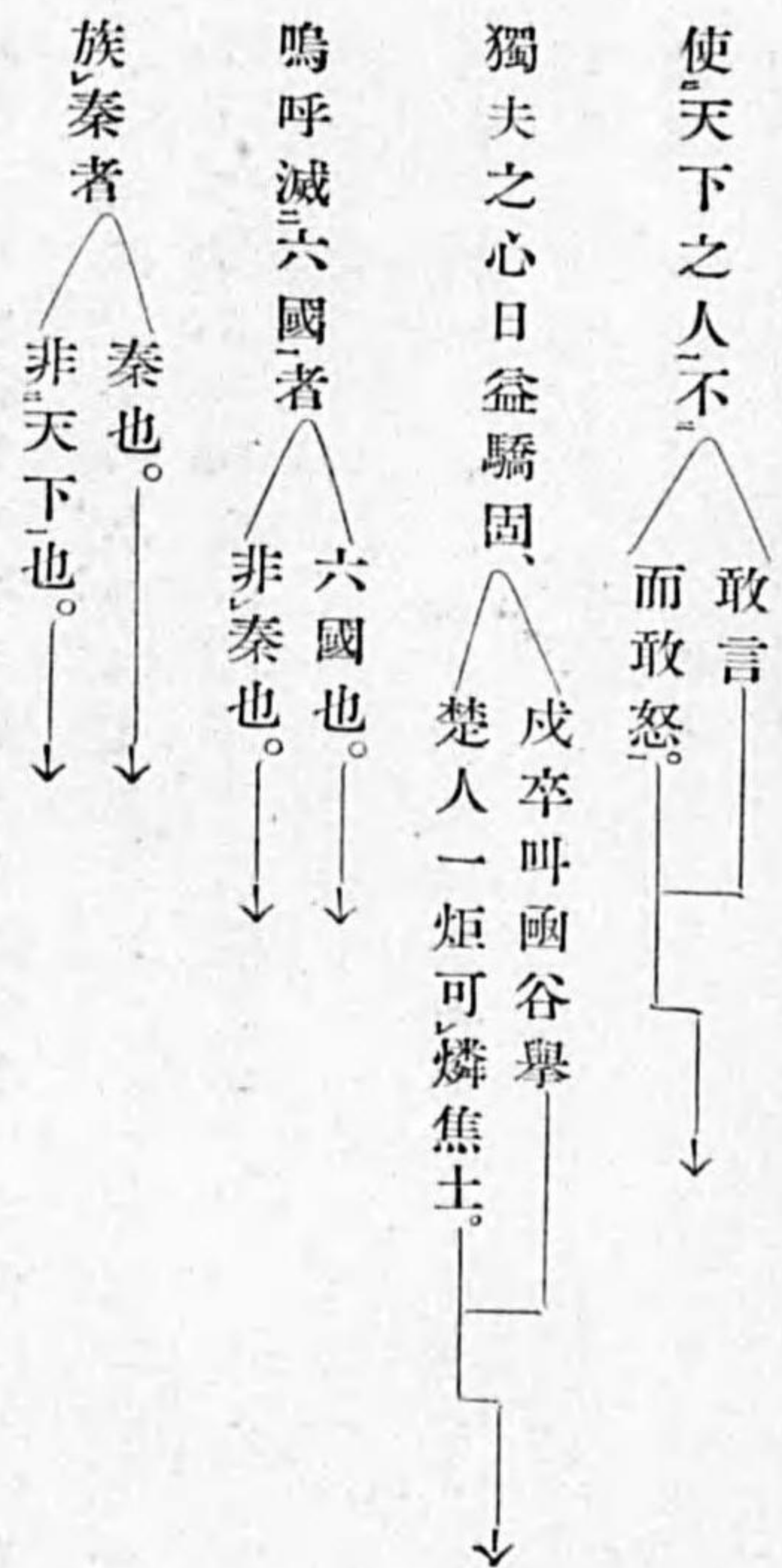
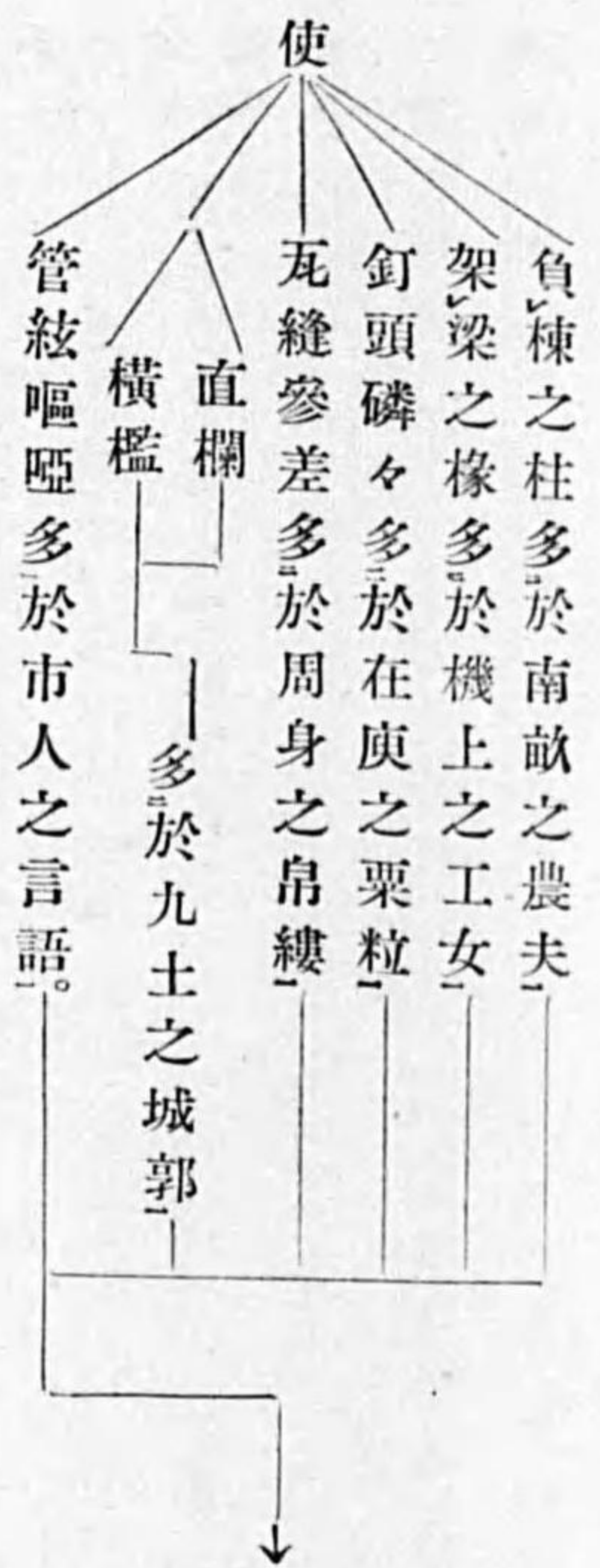
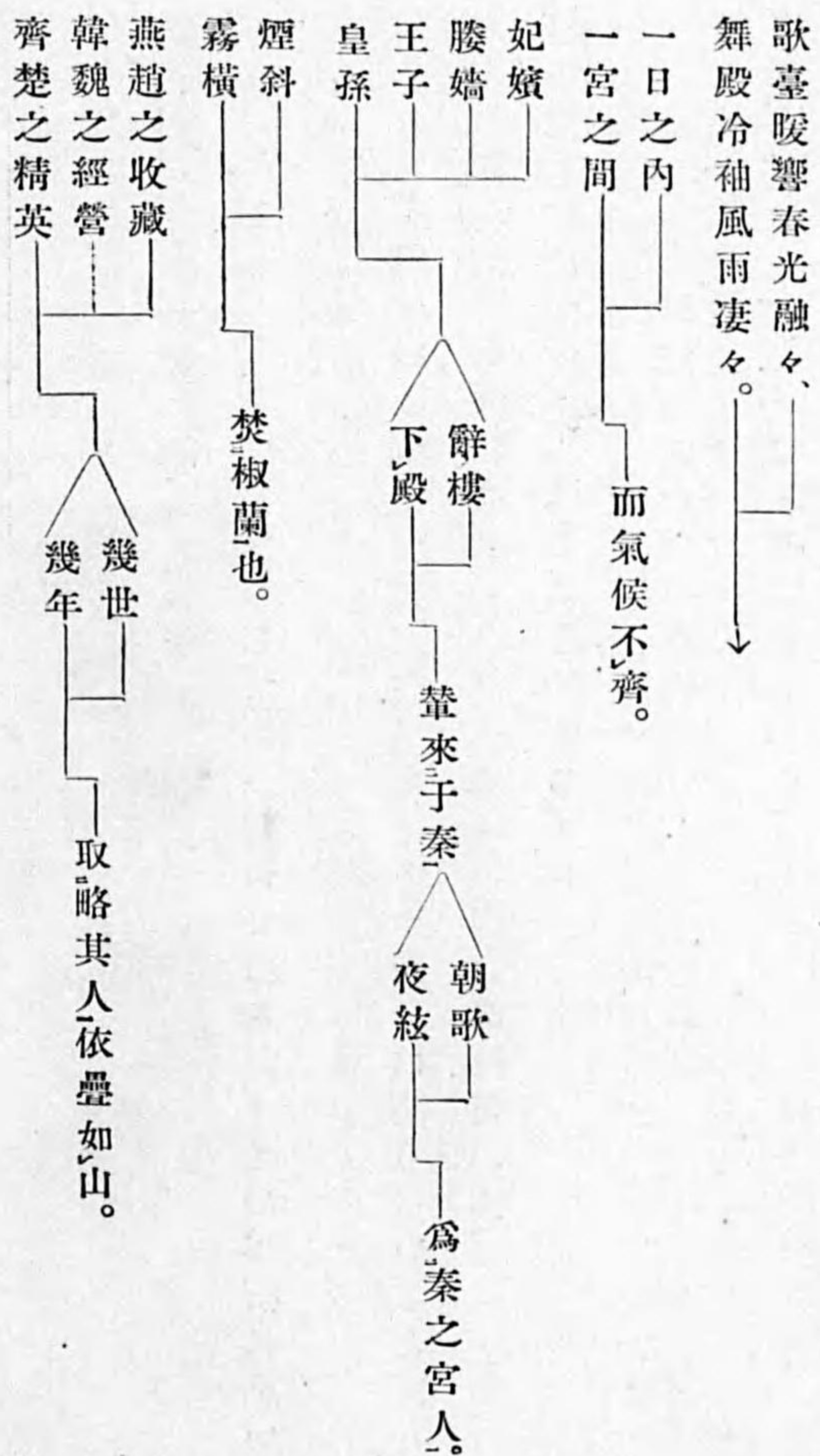
單流断句 觀念流の單一な断定を表はす断句を單流断句といふ。例へば

1 大凡物不得其平則鳴。韓愈送孟東野序

2 人之於言也亦然。同

の類だ。

並流斷句 二系以上の觀念流が一系に統一されてゐる單斷句を並流斷句といふ。例へば杜牧之の阿房宮の賦の



これら二つ以上の觀念流は \wedge の様な形式を取るか \lrcorner の様な形式を取るか

或はその二つを兼ねるかであるが、何れも全く無関係なる二つ以上の流ではなく、初め一つであつたものが二つ以上に分れるか、二つ以上のものが後に一つに合するか、或は中途に於てのみ分れてゐるかであつて、初か終か一度は同一意識内に統一されるのである。そういふのを並流といふ。

並流は同一断句中の何れかの處に於て一つの流に統一されなければならぬ。若し全く統一されないならば其れは別々のものであつて並流ではない。例へば

明星熒々開粧鏡也。

綠雲擾々梳曉鬢也。

渭流漲膩棄脂水也。

煙斜霧橫焚椒蘭也。

この四つは阿房宮賦中の一段であるが、四つの断句であるから並流ではない。一つの断句の内部に於て四流に分れた處が有るのでなければ並流ではない。

詞

詞は断句の材料たるべきものであつて自己單獨の力に由つて觀念(概念を含む)を表はすものである。例へば「山河往來遠近其夫寧或焉哉」などの類だ。詞に單詞と連詞との別が有る。

單詞とは單一の詞であつて之を分けると詞で無くなるものである。「山は一單詞である。分け様が無い。」「伯樂瑪瑙」や「諸葛歐陽」などは一單詞である。分ければ最初の意義と關係の無いものになる。連詞は、詞と詞とが一方は他の一方に従屬し一方は之を統率し従屬統率の關係を以て二者が統合されてゐるもので、外部から觀れば一詞として意義を成し、内部から觀れば二詞を成してゐるものである。例へば

「古之聖人」

「今人之詩」

「死而後止」

「去不復來」

「由此觀之」

「使人言」

「甚遠」

「頗近」

「花落」

「月出於東天」

の「…」の様な類だ。此等皆一つの事物を表はし一つの事件を表はし一つの状態を表はすのであるから、其の内部に區劃は有つても外部から觀れば一詞である。連詞は詞と詞との結合であるが、連詞も矢張詞であるから、連詞の中には單詞と單詞との結合もあり、單詞と連詞との結合もあり、連詞と連詞との結合もある。連詞と連詞との結合に至つては「由此觀之」の様な短いものもあるが第三頁の「郷使二世…天下集矣」の様な長いものもある。これは一斷句であるが同時に連詞である。

□詞といふと世間では單詞をのみ指す様であるが、私は其れは文法上よくないと思ふ。單詞でも連詞でも、その相違は内部の構造だけで其れの自己に對する文法上の效力に至つては全く同様である。詞と云へば特に單詞と斷らない限りは連詞をも含むものと解しなければならぬ。

□斷句は詞(單詞或は連詞)より成るものであつて詞は斷句の成分である。否、斷句は皆詞である。同じものが斷句であると同時に必ず詞である。例へば「月出於東山之上」は一つの斷句であつて同時に一つの詞(連詞)である。之を斷句といふのは一つの斷定を表はす點から言ひ、之を詞といふのは一つの概念を表はす點から言

ふので、其の觀る方面が違ふのである。出來た結果から言ふから斷句であるが、その材料から言へば詞である。喩へば木で作つた机を机だと云ふことも木だと云ふことも出來、刀を刀だといふことも鐵だといふことも出來る様なものである。但し斷句は皆詞であつても詞が皆斷句であるとは言へない。

□詞が斷句たるには二つの條件が有る。其れは其の詞が絶對性と獨立性を持つてゐることである。絶對性とは從屬語を要せず自己だけの力で具備した概念を表はす性質をいふ。例へば「出來」は物の作用を表はす語であつて或る主體に對して相對的な概念を表はすのであるから、相對の基準を示す語例へば「月入」などの類を加へて「月出人來」などの様に言はなければ意義が具備しない。「月出人來」は絶對性が有るのみならず獨立性も有るから斷句になる。併し「月出則」と云ふと絶對性は有るが獨立性は失はれる。其れ故他語へ從屬して「月出則我賞之」などの様に言はなければならぬ。そうして「我賞之」は獨立性が有るから「月出則我賞之」は斷句になる。

□單詞であつても絶對性と獨立性とが有ればそのまゝ斷句になる。例へば「然否」

嗚呼等は單詞であるがそのまゝ斷句になり得る。斷句は必しも連詞ばかりとは限らない。

原 辭

□原辭は言語の最低階段であつて、詞の材料となるものである。原辭に完辭と不完辭との二種が有る。

完辭とはそのまゝ詞となり得る原辭である。「山河之而焉矣」などの類だ。

不完辭とは他の原辭と結合して共に一詞を成すもので、自己だけでは一詞を成さない原辭である。日本語ていふと所謂の助辭例へば「て」を「はなりたりらるしむ」などの類や、接頭辭、接尾辭例へば「みさぶるめく」などの類がそうだ。「山に山は行きたり行かしまみ山さ夜春めく」などの様に他語へ附いて共に一詞を成すので「は」なり「しむみさ」などだけでは一詞を成さない。

□漢文にはこの不完辭といふものが殆ど無い。「阿兄阿母」などの「阿や」浩々乎飄々乎など、乎の類が或は不完辭と云へようか。これらの外には眞の不完辭と稱すべ

きものが無い。彼の「而之於以矣焉乎哉」などの類を日本の助辭と同様に考へたならば其れは大變な誤である。こゝにいふものは意義は形式的であつても單獨性は決して失はれて居ない。皆完辭である。そのまゝそれぞれの詞になるのである。日本語には又一種の特種な原辭が有る。其れは漢字を音で讀んで「しゆん」(春)「しう」(秋)「えん」(鉛)「ひつ」(筆)などといふ場合である。「はるなまり」と云へば完辭であるが「しゆんえん」てはまだ一詞を成さない。これらは原辭どうしが連絡して「しゆんじうえんびつ」と云ふ風になれば完辭になる。そこで日本では漢字一字なれば訓で讀み二字偶用のものは音で讀むといふ場合が多いのである。但し一字でも「仁」「義」「忠」「孝」などの様に完辭化したものは澤山有る。凡そ漢字は支那人に於ては一字々々音讀されて皆完辭である。そこが日本と大變に違ふ。完辭はそのまゝ詞になるものである。然るに「山河」などは完辭か詞かといふと、それは觀る方面が違ふ。同じものでも斷句の材料として觀て之を詞と云ひ、詞の材料として觀て之を完辭といふのである。喩へば同じ男でも子から見れば父、妻から見れば夫、國から見れば人民である。

原辭には單辭と連辭との別がある。「春雨秋風」などは單辭であるが「春雨秋風」などは連辭である。「春雨秋風」などは詞としては單詞であつて連詞ではない。唯連辭の單詞である。連詞は「春之雨秋之風」だ。

第二章 文法學

第一節 文法學の本質及び諸相

學問 學問は理論的知識である。知識と知識との間に存する理論に據つて第三の知識に到達するものであつて、研究の作用と研究の結果との兩面を持つてゐる。學問は知識であるが理論的知識でなければ學問ではない。例へば夏と冬と晝夜に長短の別の有ることは誰も知つて居るがこれは單純な常識であつて學問ではない。其れが地軸の傾斜に因つて起るといふ理論が分つて始めて學問である。

科學 科學は一科の學問である。相關係する多數の理論的知識が一つの體系

に統一されて居るものである。科學の「科」は體系的を意味し、學は理論的知識を意味する。科學は知識であるが、其れが理論的知識であると共に體系的であることが必要である。夏の日の長いことを知つただけでは理論的知識ではなく、其れが地軸の傾斜に依ることを知つたならば理論的知識ではあるが、單一なる知識であつて科學ではない。唯科學の一部分たるに過ぎない。其れ等相關係する諸知識が體系的に整理されて地文學とか氣象學とかいふものになつて始めて一つの科學なのである。

科學の中には歴史などの様に具體的な現象の研究であつて、そのまゝ直接に他に應用されないものも有る。之を具體的科學といふ。又物理學、心理學などの様に或る現象間に存する抽象的法則の研究であつて直接に他に應用することの出来るものが有る。之を抽象的科學といふ。

科學の中には宇宙の全現象を統一する絶對普遍の最高法則を研究する哲學と、宇宙間の一部特殊の現象に普遍なる法則を研究する分科學と有る。

科學の中には人間の精神作用に基く諸現象を研究する人文科學と自然現象を研

究する自然科学との二種が有る。

又科学研究の態度からいふと、哲學や理論物理學などの様な宇宙間の諸現象間に存する根本法則を研究するのと、動物學や天文學などの様に事實を主として研究するのとの二種がある。前者を理論的研究とし其の學を理論的科學とし、後者を記述的研究とし其の學を記述的科學とする。

文法學 文法學は科學である。言語構成の法則を研究するものである。其中或る一國語の文法を研究するものを國文法學とし、何れの國語といふことなく一般に言語に就いてその文法を研究するものを一般文法學とする。

文法學は廣義の言語學の一部である。廣義の言語學は苟くも言語に關する研究は皆之を含むのである。そうして其れが一國語の研究であるならば廣義の國語學である。其の中國語の發達變遷に關するものを國語發達史として、音韻に關するものを音韻學とし、文字に關するものを文字學とし、國語學の發達に關するものを國語學史とし、文法に關するものを國文法學とする。

文法學は其の研究の態度に次の二種が有る。

記述文法學 特殊の國語に存するその國文法を記述するものである。固より科學であるから理論を無視する譯ではないが、理論よりも具體的事實を主とする。今日普通に存する文法書は皆此の流である。其の目的は讀書作文に應用するに在るのであるから學科であると同時に一面から言つて一つの方術である。

理論文法學 具體的事實を經として、理論を主として研究するものである。これに一般理論文法學と國語理論文法學との二種が有り得る。一般理論文法學は何れの國語にも拘らず唯言語といふものゝ間に存する根本の法則を研究するものであるが、これは世界の何れの國にもまだ進歩した研究がない様である。國語理論文法學は一般理論文法學的理論を以て一國語の文法を研究するものである。

第二節 文法學の體系

文法學の範圍

文法學は言語の構成法則の研究である。故に言語の構成法則以外の事は文法學

總論と各論

三

總論 總論は文法學の全般に關する一般的事項を論ずる。そうしてその一般的事項の中には各論を導き出すべき豫備的知識と各論を統一すべき整理的知識とを含むべきであるから、總論は緒論と結論との二つに歸すべきである。されば卷首に緒論を置き卷末に結論を置くことは論文の常であるが、書籍としては緒論と結論とを混合しても差支はなからうかと思ふ。

總論の内容には二つの問題が有る。一は言語の本質及びその諸相を論じ且つ文法學の體系に關係すべき諸問題を論じ、一は文法學の本質及びその諸相と文法學の體系とを論ずるに在る。

各論 各論は文法のそれぞれの部分を詳論するものである。西洋文典の常として各論は Etymology と Syntax との二部に分たれてゐる。私のいふ詞の單獨論と相關論とは略これと同じものである。併し注意すべきことは西洋の Etymology と Syntax とはその何論であるかが甚だ明確でない點があるが、私のいふ詞の單獨論

と相關論とは何れも詞論である。

言語は原辭、詞、斷句の三階段を成すものである。そうすれば一寸考へると各論は原辭論、詞論、斷句論の三分科を成すべき様であるが、それは常識であつて科學的な分ち方ではない。日本の文法書は原辭と詞とを混同して品詞と云ひ、斷句を文章と云つて居るから、各論は品詞論、文章論の二つに分つべき様に見える。そうして日本の文法書は大抵、品詞論、文章論の二分科を立て、居る。これ原辭論、詞論、斷句論の三分科と同様で常識的な分科である。

文章論の不可 □私は文章論(即ち斷句論)といふものを認めない。文章論を文章構成論だと解するならば文章論即是文法學であつて文法學の一分科ではないことになる。文法學の一分科としての文章論は、文章として既に出來上つたものゝ諸運用の論でなければならぬ。即ち品詞論を含まないものでなければならぬ。然るに文章として出來上つたものは最早これは説話の一單位であつて、どんな長い説話でも唯それを澤山重ねれば善いのであるから、特に文法學の一分科として論ずべき何物をも存しない。説明文だとか命令文だとか疑問文だとかい

ふ様なことを云ふが、それはその内部に使用された動詞の區別であつて、それらの事は動詞の用法として詞論に屬するものである。文章論として論ずべきものは一つもない。世間の文法書の文章論に論ずる所は主語、述語、客語、修飾語等の問題即ち詞と詞との相關論である。詞々の相關論以外には何物も無いのである。詞々の相關論は詞論であつて文章論ではない。

□詞と詞との結合は即ち連詞である。其れには「月」と「出でば」と結合して「月出でば」となる様な場合と「月」と「出づ」と結合して「月出づ」となる様な場合と兩方ある。前者は唯連詞を成すだけで文章にはなつてゐない。後者は連詞を成した上文章になつてゐる。前者の様な場合には詞々相關論は決して文章論ではない。唯連詞論である。後者の様な場合には詞々相關論は即ち文章論であると同時に連詞論である。この意味に於て文章論が成立するといふならば主語と述語との相關論は文章論例へば文章「月出づの」月」と「出づ」との關係を論ずると詞論例へば連詞「月出でばの」月」と「出でばの」關係を論ずると兩方に分たれなければならない。それでは文章論と詞論と重複するのみならず、同じ主語と述語の相關論が二個所に分れる不

合理を免れない。其れだから私は詞々相關論を詞論の方へ入れて文章論といふものを認めない。「月出でば」は一つの連詞であるから「月」と「出でば」の相關論は詞論である。「月出づ」は文章でもあるが矢張一つの詞(連詞)であるから「月」と「出づ」との相關論も詞論である。そつといふ風に凡てが詞論へ入れられる。文章論といふものゝ成立する餘地が無い。之に反して若し詞々相關論を詞論から奪つて、詞論は唯詞の單獨論であるとしたならば背理に陥るであらう。何となれば「月出でば」に於ける「月」と「出でば」との相關論は何論にも屬しなくなる。「月出でば」はまだ文章ではないから文章論へ入れることは誤であるし、詞論へは入れないときめた以上は、入れ場所が無くなる。

□文章は必しも二詞より成るものではない。「然り否」などの様に一詞からも成立する。されば單詞又は連詞が文章になる能力の有ることの論や、又どういふ場合に文章になるかの論は、これは詞の性質論上の問題である。文章論といふ一分科は成立しない。

□文章(斷句)は凡べて詞單詞或は連詞であるから文章論は一分科をなさずに自然

に詞論の中へ含まれるのである。勿論斷句の中には連斷句といふものが有る。連斷句は斷句と斷句との連結であつて一方の斷句が他の一方に従屬するものであるとも云へるが、しかし其の従屬するのは斷句たる資格を失つて詞の資格として従屬するのであり、従屬される方も詞の資格を以て之に對するのであるから、やはり詞と詞との統合であつて當然詞論上の問題である。

□然るに茲に又原辭といふものが有る。詞の中單詞は原辭より成るが連詞は詞と詞から成るのであつて、原辭と原辭から成るものではない。詞が相集つて連詞を成すのはそれは詞としての運用であつて、原辭としての運用ではない。故に原辭論は詞論の中へは含まれない。されば文法學の各論は原辭論と詞論との二つになる筈である。所が漢文では原辭は殆ど皆完辭であつて其のまゝ詞になる。不完辭といふものが殆どない。其れ故に日本文法學では原辭論は各論の一分科を成すが、漢文では原辭論は總論の中へ略説すれば濟むので、一分科を立てる程のものではない。故に私は漢文法に於ては原辭論といふものを立てず、唯詞論のみ立てる。そうして詞論を單獨論、相關論の二分科に分ける。その内には原辭論も

文章論も含まれるのである。單獨論は詞(單詞或は連詞)の單獨に有する性質用法を論じ、相關論は詞(單詞或は連詞)の相對的關係を論ずる。西洋文典で文法學の分科を Etymology と Syntax との二つとするのは此の精神である。Etymology, Syntax の二つを譯して單獨論、相關論と云へば善かつたのに單語論、文章論と譯したために日本の文法家がその本質を誤解したのである。

詞の單獨論

□詞の單獨論は詞の單獨に有する諸性質を論ずるものである。その詞は單詞であつても連詞であつても構はない。單詞「山川」が名詞である如く、連詞「日本之山」「西洋之河」も名詞であるし、單詞「還來」が動詞である如く、連詞「往而還」「去而復來」も動詞であつて、その名詞たる所以の用法、動詞たる所以の用法に變りはないのであるから、詞の單獨論は單詞、連詞に互つてその性質を論すべきである。所謂 Etymology と いふのはこの意味でなければならなかつた。これが單語論と考へられたのは誤である。

詞の單獨論は詞と詞の關係をば論じない。併し名詞の格などといふ様なことは論ずる。格は詞の連詞中に於ける立場を定めるものであるから他詞と全然無關係なものではないが、その他詞と關係すべき性質だけは、關係しない中にも持つてゐるのであるから、その性質は單獨論上の問題である。

詞の單獨に有する性質には本性と副性との二つが有る。本性とは其の詞の本然的に有する性質で其の詞が其の詞たるに寸時も缺くことの出来ないものである。其の詞から常に離れないのである。例へば「山」といふ語は常に事物を表はすといふ性質を持つて居り、「登」といふ詞は常に或る主體の作用を表はすといふ性質を持つてゐる。これらの性質はその詞の本性である。

副性は本性に憑依して二次的に生ずる性質であつて、其れ無しにも其の詞が考へ得られるものである。例へば「山」といふ名詞は「山高」では主語であり、「力拔山」では客語である。其の主語たり客語たる性質は場合に因つて存し場合に因つて存しない性質であつて、名詞が名詞たるに絶対に必要なものではない。これらの性質は副性である。

詞の性質を論ずるには本性と副詞とを二章に分けて論ずべきである。

詞の本性は抽象的に唯性質として論ずることも出来るが、具體的に詞に即して詞の分類に由つて論ずる方が適當である。そうして詞の本性には色々有る。我々の捉へなければならぬ本性はその斷句を構成する上に於て重大なる關係を有する根本的のものでなければならぬ。此の根本的なる本性に由つて詞を名詞、動詞、副詞、副體詞、感動詞などゝ分類し、その各の種を品詞と名づける。そこで品詞論は詞の本性論の一節となる。此の品詞別は更に其の本性の小異に由つて細別される。例へば名詞を本名詞、代名詞、不定名詞、形式名詞とし、動詞を本動的、代動詞、不定動詞、形式動詞とする類だ。併しこの細別は前の品詞別を大別と見たから細別となるのであつて、逆に一方を細別と見れば最初の細別だつた方が大別になるので、實は同等の位置に在る縦横の關係である。詞を大別して本詞、代詞、不定詞、形式詞とすればこの方が大別であつて、その各に名詞動詞等の細別が有ることになる。そこで此の第二の分類(細別と云つた方)も本性論であるから、此れも單獨論の一節となるのである。

詞の副性は本性に依據して存するものである。そうして此の副性には、連詞又は斷句中に於ける自己の立場に關係するものと、關係しないものとの二種が有る。前者を格と云ひ、後者を相といふ。例へば

1 武王伐殷。

2 伯夷諫武王。

3 成王父即武王。

の(1)の武王は「伐殷」に對し主語として之に従屬し、(2)の「武王」は「諫」に對し客語として之に従屬し何れも從屬的立場に在るが、(3)の「武王」は何物にも從屬せずその斷句の代表部となつて獨立の立場に在る。そうして此の立場は他詞との關係上に存するけれども、さういふ立場を取り得べき資格は他詞と關係しない單獨の詞たる「武王」にも存して居る。此の資格は即ち格と稱する副性である。

1 高祖戮英布。

2 戮英布者高祖也。

3 英布以叛而戮。

4 英布之以叛而戮固其所也。

の(1)(2)の「戮」は戮する動作て之を原動態といひ、(3)(4)の「戮」は戮せられる動作て之を被動態といふ。(1)と(3)の「戮」は何れも其の斷句を代表して獨立し他語へ從屬しない立場に在るが、(2)と(4)の「戮」は獨立せず下の語へ從屬する立場に在る。此れに由つて之を觀れば、原動被動の別は「戮」といふ詞の副性ではあるが、その詞の連詞又は斷句中に於ける立場に關係のないことが明である。この原動被動の様な詞の連詞中に於ける立場に關係しない副性を相といふのである。副性論は本性論と相對して詞の單獨論の一章を成すものである。

詞の相關論

□詞の中には其の本性副性の如何に由つて、一詞そのまゝにて一斷句を成すものが有る。例へば「然」「否」の類はさうだ。此れらも「然らば」「否ざれば」などの意である場合には從屬性を帯びるからそのまゝ一斷句にならずに他語へ從屬する。又「然」なども否定の意を帯びれば「不」の從屬を受けなければ斷句にならない。詞が一詞で

そのまゝ、斷句になる場合は他詞との相對的關係は生じないが、苟くも他詞と共に連詞を成す以上はその詞の單獨の性質以外に詞々の間に相對的關係を生ずる。此の詞々相對の關係に於ける法則を論ずるのが詞の相關論である。詞の相關論は詞の單獨の性質をば論ぜず、唯詞と詞とを以て連詞を作る方法を論ずるもので即ち連詞構成論である。

□連詞中に於ける詞と詞との關係は唯一つ從屬と統率の關係である。從屬と統率とは二者の間に生ずる一つの作用を兩面から觀た區別であつて本來同一物である。從屬を表とすれば其の裏は統率、統率を表とすればその裏は從屬で別々の物ではない。之を一語で謂つて統合關係といふ。しかし其の統合され方には色々有る。

- 1 明○月○出………主○語○と叙○述○語
- 2 賞○明○月………歸○著○語○と客○語
- 3 明○月○之○(光)………實○質○語○と形○式○語
- 4 今○宵○賞○月………修○用○語○と被○修○用○語
- 5 此○良○夜………連○體○語○と被○連○體○語

の○○は從屬語で●●に從屬し、●●は統率語で○○を統率してその連詞を代表してゐるが(1)では○○を主語と名づけ●●を敘述語と名ける。(2)(3)(4)(5)皆右の例の下に註する様にその統合關係が違ふ。

凡そ連詞は右の様な種々の統合關係に由つて成立するが、連詞必ずしも斷句を成すのではない。其れが斷句を成すには其れ／＼の條件が有る。即ち其の詞が絶對性と獨立性を帯びることを要する。絶對性とは自己の意義が完備して既に他語の從屬を要しないこと、獨立性とは意義が終結して他語へ從屬しないことである。單詞でもこの條件が具備して居れば其のまゝで斷句になるし、その條件がまだ具備しなければ具備するまで他語と相統合するのである。

相關論の任務は絶對性と獨立性とを有しない詞をして他詞との統合に由つて絶對化せしめ獨立化せしめる過程を論ずるに在る。其處で詞の連詞中に於ける相對關係の種別を論ずること、如何なる詞は如何なる統合を要するかといふことと、統合されたる場合に於ける詞と詞との先後的位置と、此の三者を論ずる必要が

ある。前者は成分論で中者は統合論で後者は排列論である。詞の相關論はこの三者に盡きる。Syntaxとはこういふ解釋に於けるSyntaxでなければならなかつた筈である。

第二編 詞の單獨論

第一章 詞の本性

第一節 品詞

吾々が文法學に於て詞の性能、詞の本性といふのは文法的性能、文法的本性のことである。月を太陰と云へば曆學的で、嫦娥と云へば詩的で、月亮と云へば鄙俗であるが、其ういふことも其の詞の性能には違ひないけれども、其れは文法には何等の關係のないこととて文法的性能ではない。文法的性能は詞が斷句となつて說話を構成する上に直接に關係する性能でなければならぬ。

詞の本性の相違は即ち詞の種類を成す。それ故詞の本性を明にするには詞の分類に依らなければならぬ。そうして詞の分類は、その斷句を構成する上に重大の關係を有する根本的な本性に基いて行はれなければならない。

日本の多数の文法書は従来、詞を分類して

名詞

代名詞

動詞

形容詞

副詞

接續詞

助詞

助動詞

感動詞

の九品詞とした。この分類は詞と原辭とを混同したものであつて甚だ不合理である。殊に漢文に於ては適用しやうがない。漢文には助詞、助動詞などは無い。そうして九品詞の中へ入れられないものも有る。

英文典では通常

名詞

代名詞

形容詞

動詞

副詞

前置詞

接續詞

感動詞

の八品詞を立て、居る。漢文法では日本文典の九品詞に因るよりは此の方が稍適當である。中には此れに由つた漢文典もある様である。併し矢張これも不當と思ふ。

英文典はもと希臘文典羅甸文典の模倣であるが、其れとても相類似したアリアン語族の文典であるから、其の八品詞で曲りなりに英文法が解かれて居る。日本文典の九品詞は英文典の模倣であるが、多少改造されて居るから矢張曲りなりに日本文法が解かれてゐる。併し漢文法を解くに之を其のまゝ採用することは出来なう。

吾々は曲りなりといふことは好まない。其れ故英文典や日本文典を模倣して漢文に適合する様にすると、いふことは學に忠なる所以ではないと思ふ。如かず、世界に共通普遍なる人間言語の根本法則を探求し、何れの國語にも適合する様に詞を分類すべきだと思ふ。そうして説かれた漢文法が眞の漢文法であらう。

詞の本性と詞類 詞の性能は之を五種に分つことが出来る。そうして詞の大概は各この五種の性能の一つを有する。そういふ詞を單性詞といふ。單性詞は其の有する性能の如何に由つて五種に分たれる。然るに詞の中には一詞でありながら二つ以上の性能を有するものが有り得る。そういふ詞を複性詞といふ。そこで凡べての詞は五種の單性詞と、まう一つ複性詞との六種に分たれることに

なる。即ち

名詞 事物の概念を表はす。

動詞 作用の概念を表はす。

副體詞 他概念の實體に従屬する屬性概念を表はす。(第六頁に説く)

副詞 他概念の運用に従屬する屬性概念を表はす。

感動詞 未だ概念化せざる單純なる觀念を主觀的に表はす。

複性詞 無關係なる二つ以上の概念を表はす。(第三頁に詳し)

この六種である。この六種の各を品詞と名づける。世界に有りと有らゆる國語に存する總べての詞は此の六品詞の中の何れかに屬する。所謂る代名詞、形容詞、接續詞、前置詞等も皆この六種の中の何れかに屬するのである。

□五種の單性詞は皆一個の性能を持つて居る。例へば名詞ならば事物を表はすといふ性能、動詞ならば作用を表はすといふ性能を持つて居る様に、其の有する性能が一つだ。併し中には、二個の性能を持つて居つて其の中の一つが他の一個を統率して之を自己に従屬せしめ、自己が全體を代表して居るのがある。例へば

子曰君子恥其言之過其行

の「過」は「言」の「行」に對する作用を敘述する點は動詞的性能を有し、その「恥」の客體を表はす點は名詞的性能を有するが、これは名詞的性能の方が「過」の意義の全體を代表して居るから「過」といふ全體を一つの性能だと見るとが出来る。二性能が一性能化したものと見るとが出来る。こゝにいふのを變態詞といふ。變態詞は其の代表的性能に由つて名詞、動詞、副體詞、副詞、感動詞の何れかに屬せしめられる。だから變體詞は全く無關係の二概念を表はす複性詞とは違ひ、單性詞の一種と見られる。

名詞

こゝに名詞といふのは廣義であつて代名詞を含むものである。名詞は事物の概念を表はす品詞である。例へば

山 川 天 地
文 詩 藝 才

堯	舜	夏	殷
我	汝	某	誰
一	二	十	百

などは名詞である。こゝにいふ名詞は分つべからざる一つの原辭から成立してゐるから之を單辭の名詞といふ。又、

天子	庶民	動物	植物
政治	法律	仁義	道德
足下	大人	小子	賤妾
天地人	智仁勇	東西南北	仁義禮智信

なども名詞である。こゝにいふ名詞は二つ以上の原辭が結合して出来たものであるから之を連辭の名詞といふ。二つ以上續いた漢字で書き表はされるものは多くは連辭的名詞だ。併し

琥珀	瑪瑙	蒙古	印度
伽藍	浮圖	扶桑	震旦

などの様なものは分解して各が意義を有するものではないから漢字は二つでも二音の一單辭と見なければならぬ。又もとは連辭であつたものでも語源の分らないものは既に單辭化したものである。

單辭の名詞は本來の單詞的名詞であるが連辭の名詞も矢張單詞的名詞である。然るにこゝに又連詞的名詞といふべきものがある。

連詞的名詞 □連詞的名詞とは二個以上の詞が文法上の關係を以て相連續しその中の一つに名詞的意義があり其れが全體を代表してゐるものである。例へば

- 「蘇張之辯」
- 「南柯之夢」
- 「不俱戴天之仇」
- 「旁若無人之行」
- 「古之欲明明德於天下者」

何則「非有平生之素卒然相遇於草野之間而命以僕妾之役油然而不恠者」此固「秦皇所不能驚」而「項籍之所不能怒」也。蘇東坡留侯論

の「……」の類だ。皆その内の・の詞が軸となつてその「……」の全體を統率代表し全體をして一つの長い名詞たらしめる。

連詞的名詞の中には随分長いのがあり得る。例へば

愿之言曰、人之稱大丈夫者、我知之矣。『利澤施於人、名聲昭于時、坐于廟廊、進退百官、而佐天子、出令其在、外則樹旗旌、羅弓矢、武夫前呵、從者塞途、供給之人各執其物、夾道而疾馳、喜有賞、怒有刑、才峻滿前道、古今而譽盛、德入耳而不煩、曲眉豐頰、清聲而便體、秀外而惠中、飄飄裾、翳長袖、粉白黛綠者、列屋而閑居、妬寵而負恃、爭妍而取憐』大丈夫之遇、知於天子、用力於當世者之所爲也、吾非惡此而逃之、也是有命焉、不可幸而致也。韓愈送李愿序

の「……」は百十七字あつて一つの連詞的名詞である。如何に長くても其れは内部が複雑であるだけで、要するに一つの事物概念を表はすものであつて、その名詞として其の効力は單詞的名詞と同じである。

連詞的名詞といふことが分らないと漢文を作つても文字の顛倒を誤り易い。今名詞へ「……」を附けて例を擧げると

1 讀「書」

2 讀「有益之書」

3 讀「最有益之書」

4 讀「其於立身行道最有益之書」

「……」は皆讀まれる事物を表はすのであるから其の文字は一纏めにならなければならぬ。「讀」はどこまでも「……」の外でなければならぬ。「讀」は日本語では「……」の下へ用ゐる漢文では上へ用ゐるが、要するに「……」の外である。決して「讀む」が「……」の中へ飛びこむことはない。右の例は之を圖解すれば



の如く長くても□を懸けたものを一字だと見れば何のことはない。世の文法書は名詞と云へば單詞的名詞をのみ指すが私は取らない。連詞的名詞も名詞の一種でなければならぬ。

連詞的名詞は外部から観れば一つの名詞であるが、内部から見れば二詞以上の詞の連合である。されば連詞的名詞の名詞としての本性は詞の單獨論で論ずるが、連詞的名詞の作られる方法は詞の單獨論の與かる所ではない。其れは詞の相關論に於て講ぜられなければならない。

代名詞 世間の文法書は多くは「我」「汝」「彼」「此」の類を一品詞とし之を代名詞と稱する。之を代名詞と稱することは差支ないが、之を一品詞と稱することは不合理だと思ふ。代名詞も矢張事物の概念を表はすものであつて、要するに名詞の一種である。其の事物を表はす點に於て其れ以外の名詞と全く同一であり、其の他の文法的諸性能に於ても大同小異である。されば品詞としては名詞の中へ入れ、品詞の小分に於て名詞の中に代名詞とそうでない名詞とのあることをいふべきである。このことは尙第兌頁で述べる。

事物の概念 名詞を定義して名詞は事物を表はすものだと言ふ以上、事物の概念を明にする必要がある。文法上事物の概念といふのは作用の主體として考へ得べき概念をいふのである。宇宙間の森羅萬象は之を作用と主體とに分解して

考へることが出来る。作用と主體とは相對的に考へられるものであつて作用を發生するものが主體であり主體から派生するものが作用である。「花散」と云へば「花」は主體で「散」は作用である。但し作用でも之を作用とせず一つの主體として考へる場合はある。その場合には勿論名詞である。例へば「人死」の「死」は作用であるが「我豈敢不畏死哉」の「死」は作用概念を材料として作つた主體概念で其の詞は名詞だ。事物の概念は主體たり得べく、主體たり得べき概念は客體たり得べきものである。「花散」の「花」は主體だが「風散花」の「花」は客體である。そこで事物の概念は作用の主客體たり得べきものであるとも云へる。

動詞

こゝに動詞といふのは廣義であつて日本文典にいふやうな形容詞をも含むものである。

動詞は作用動作或は状態の概念を表はして或る物に對して判斷を下す詞である。例へば

花「開」

月「出」

人「觀」月

風「散」花

鳥「在」枝

「有」酒「無」肴

山「高」月「小」

月「白」風「清」

の「」の類だ。「開」は花の作用(動作を表はし)、「出」は月の作用(動作を表はし)、「高」「小」は山、月の作用状態を表はしてゐる。

「有」「無」「在」などは作用でないと思ふ人もあるであらうが、其れは作用といふことを狭義に考へるからである。作用といふ語は廣義に考へれば狭義の動作ばかりをいふのではなく、靜止的動作をも状態をも含むのである。

動詞は作用の概念を表はすものであるが、作用の概念は必ず或るものに對して判斷を下すものである。例へば

智者樂水仁者樂山。

青出于藍青于藍冰水爲之寒于水。

の「樂出」「青爲」「寒」は智者、仁者、青、冰に就いて之に判斷を下してゐる。此の判斷を下す

性質を判定性といふ。そうして判定性は概念の性質であるが、言語の方から云へば判定性は即ち敘述性である。されば動詞は判定性を有する概念を表はすので即ち敘述性の有る語なのである。敘述性のない動詞といふものは全く無い。但し判定性は名詞にも有る場合がある。

神者天地之主宰而人者萬物之靈。

の「主宰」は名詞であるが「神者」「人者」に對して判斷を下してゐる。其れ故判定性敘述性の有ることは必しも動詞の特徴ではない。

動詞の中には「知忘」「言行」「賣買」などの様な本來一詞であるものもあるし、感激忿怒咲笑「微行」「直言」などの様な二辭が一單詞となつたものもある。前者は單辭の動詞であることは勿論單詞の動詞である。後者は連辭の動詞である。連辭の動詞はもとほ二詞の結合ではあるが一詞化したもので一氣に發音される。それだから矢張單詞の動詞である。

連詞的動詞 □世間の人は動詞と云へば多く單詞の動詞を指すのであるが、連詞的動詞も亦動詞であることを忘れてはならない。例へば

月「出」

の「出」は單詞的動詞であつて「月」の作用を敘述するが

月「出於東山之上」

の「……」も月の作用を敘述する。「東山之上」は作用ではないが「出於東山之上」は作用である。唯「出於東山之上」ばかりではなく、

「月出於東山之上」

「須臾月出於東山之上徘徊於斗牛之間」

の「……」も皆、一つの連詞的動詞である。

連詞的動詞は二詞以上の統合に由つて成立するもので、其の統合の法則は詞の相關論に於て講ぜられる。詞の單獨論では單詞又は既に出來上つた連詞に就て其の性質運用を論ずるだけである。

形容詞 日本文典の多くは「高低」「長短」「白黒」「善惡」の様なものを形容詞と稱して之を一品詞に立て、居るが、これらは作用の一種なる状態を表はすものであつて、その概念には判定性(言語の方から云つて敘述性)が有る。それだから動詞の一種で

ある。之を形容詞といふ一品詞とすることはよくない。私は之を一種の動詞とする。

副體詞 Adjective

副體詞は英文典に所謂形容詞(Adjective)中の限定形容詞(Limiting adjective)である。

□副體詞は屬性の概念を表はし他語の意義の實體意義そのものに從屬する語である。

「諸有功者」

「凡君子人」

「各隊伍」

「該人物」

「翌三年」

「明十日」

「昨元年」

「故嚴君」

の「」の類だ。皆下の名詞を基本として之に從屬しその名詞の表はす概念の實體を限定してゐる。

凡そ副體詞は大抵名詞の上へ用ゐられる。(第四節參考)

漢文で副體詞たるものも日本の訓譯に於ては必しも副體詞であるとは限らない。例へば「諸學校」の如きは「諸の學校」と讀めば「諸」は副體詞であるが「シヨガツカウ」と一氣に讀めば日本語としては「諸學校」全體が一名詞である。「翌三年故嚴君」などの類は「翌故」の所で切つて讀むから訓譯に於ても副體詞である。「凡」は「凡そ」と讀むから訓譯では副詞である。漢文そのものとしての品詞別と訓讀した上の日本語としての品詞別とは嚴密に區別されなければならない。

副體詞は其の數が甚だ少ない。英語などに於ても眞の副體詞は冠詞、指示形容詞、數詞の三種であつて澤山はない。英文典でいふ性質形容詞(Qualifying adjective)と稱するものは主語を取らないから敘述性がないと誤解されてアデクティブの内へ入れられてゐるが實は動詞の一種であつて判定性が有る。體に副詞といふ意だ。體を體言の義と解したい。副體詞は屬性の概念を表はすものである。屬性の概念には判定性はない。判定性が有れば作用の概念である。それ故動詞には敘述性が有るが副體詞には敘述性はない。副體詞と動詞との別は下の名詞と顛倒して見れば分る。

連體的用法

終止的用法

- 「聰明」學生……………學生聰明
- 「忠良」臣民……………臣民忠良
- 「巨大」戰艦……………戰艦巨大
- 「窈窕」美人……………美人窈窕

は顛倒して意義が通ずる。それは「」に敘述性があるから顛倒した場合に敘述語となるのである。そういふのは動詞だ。

- 「諸」學校……………學校「諸」。
- 「凡」學校……………學校「凡」。
- 「該」人物……………人物「該」。
- 「翌」三年……………三年「翌」。

は顛倒が出来ない。下段の「」は意義を成さない。其れは敘述性がないからである。こゝういふのは副體詞だ。

副詞

こゝに副詞といふのは英文典などに所謂る前置詞及び接續詞の或るものを含むのである。

□副詞は屬性の概念を表はし他語の上に從屬して他語の意義の運用を限定修飾するものであつて敘述性のない詞である。

「夫天地者萬物之逆旅光陰者百代之過客。」李太白春夜宴桃李園序、劈頭

而浮生若夢爲歡幾何古人秉燭夜遊良有以也。同次

「況陽春召我以煙景大塊假我以文章。」同次

會桃李之芳園序天倫之樂事群季俊秀皆爲惠連吾人詠歌獨慚康樂。同次

幽賞未已高談轉清開瓊筵以坐花飛羽觴而醉月。同次

不有佳作何伸雅懷如詩不成罰依金谷酒數。同次

の「」は皆副詞である。それぞれ其の下の語へ從屬しその意義の運用を限定修飾してゐる。

副詞は多く動詞の上に用ゐられ副體詞は名詞の上に用ゐられる。併しそれは大體のことであつて必ずそうとばかりは云へない。副詞の中にも名詞の上に用ゐられ名詞の意義の運用を修飾するものがある。例へば

「惟回鶻於唐最親。」韓愈送殷員外序

呂氏之族若產祿輩皆庸才不足卹獨贈豪傑諸將所不能制後世之患無大於

此者矣。蘇老泉高祖論

「況當陵者豈易爲力哉。」李陵答蘇武書

の「唯」「獨」「況」は名詞の上に從屬しても名詞の意義そのものを修飾するのではなく、意義の運用を修飾するのである。意義の取扱方を表はすのである。

副詞といふ語は歐語 Adverb の譯語である。直譯すれば副動詞であつて原義は動詞の前へ副へる意である。副體詞に對して副用詞といふべきであるが慣用に隨つて副詞と云つておく。

接續詞 □世の文法書は多く接續詞といふ品詞を立てゝゐる。例へば次の「」の類である。

求也退、故進之、由也兼、人故退之。論語先進

項王曰、賜之旒肩、則與一生旒肩。史記項羽本紀

今夫當爲而不爲、又誘館中他人、及後生者、此大惑已。柳子厚與韓愈書

飲且食、兮壽而康、無不足兮奚所望。韓愈送李愿序

上下の語を接續するから接續詞には相違ない。併しこれは下の語の意義の運用を註解するのであるから副詞である。唯通常の副詞と違ふ點は、上の語の意義を承け其の意義を借りて下の語の運用を表はすことにある。則ち承前の副詞とも云ふべきものである。接續詞といふ一品詞を立てては副詞であつて同時に接續詞でもあることになるから不都合である。

前置詞 □ 歐語文典に所謂る前置詞(Preposition)は漢文で云へば「於」「以」などの類だ。

「以禮爲羅」於「是知之」の「以於」の様に名詞の前へ置くから前置詞と云ふのであるが、名詞を率ゐて名詞と共に一つの連詞を成して其の次の動詞を修飾するのである。

「以禮爲羅」の「以禮」は「爲羅」を修飾し、於「是知之」の「於」は「知之」を修飾する。そうして「以禮」於「是」の「是」は「以於」の意義を補ふためであつて、意義の代表部は「以於」であるか

ら「以於」が「爲禮」知之を修飾するとも云へる。それであるから「以於」は一種の副詞である。唯意義が不完備であつてその次へ名詞を置いてその不完備を補充する必要があるだけである。副詞には相違ない。前置詞といふ一品詞を立てることは不合理である。

冒稱副詞 名詞も他語の意義の運用へ從屬して之を修飾する場合がある。例へば

朝聞遊子唱離歌、昨夜微霜初度河、鴻雁不堪愁裏聽、雲山況是客中過。李頎送魏萬
去年燕巢主人屋、今年花發路傍枝、年々爲客不到舍、舊國存亡那得知。薛業涪州客舍

寄柳博士芳
樓前相望不相知、陌上相逢詎相識。盧照鄰長安古意

の。などがそうだ。之を名詞の連用的用法といふ。苟くも名詞である以上、副詞ではな

感動詞

感動詞は説話者自己の思想の状態を主観的に表示する詞である。

三

華封人曰嘻請祝聖人使聖人壽富多男子。十八史略五帝

嗟乎此吾在術中而不悟吾不及蘇君明矣。史記張儀列傳

于嗟嚶々兮生之無故幹棄周鼎兮而寶康瓠。同賈生列傳

顏淵死子曰噫天喪予天喪予。論語先進

哀公問弟子孰爲好學孔子對曰有顏回者好學不遷怒不貳過不幸短命死矣今也則亡未聞好學者也。同雅也

君子哉若人尙德哉若人。同憲問

の●の類がそうだ。

□感動詞以外の諸品詞は名詞動詞副體詞副詞皆概念を表はすものである。その表はし方は客觀的である。例へば「花」といふ名詞でも「開」といふ動詞でも其れは皆概念を表はすのである。概念には必ず其れに客觀的對象がある。世の中に「花」といふ物が有り「開」といふ作用がある。又妖怪とか云ふ様な實際にはないものゝ概念であつても、その存在を豫想して始めてその概念が出来る。縱令無いものでも概念と

してはこれを假に在るとして取扱ふのである。又自己の心内の悲みでも喜びでも概念としては自己が自己を客觀して他物の如く取扱つて始めてその概念が構成される。然るに感動詞に在つては全く主觀的である。驚いて「おや」と云ふが、それは自分が驚いてのみ「おや」といふので、他人の驚きに對しては「おや」とは云はない。自分が驚いても他人が驚いても均しく「驚いた」であるが、他人の驚いたのは「おや」ではない。

他の諸品詞は思念を表はすが思念その物の表示ではない。「花美し」と云つても花といふ概念が美しいのではなく花といふ概念の對象たる客觀物が美しいのである。花の美くしいのを見て「あゝ」と感嘆した場合は「あゝ」は思念其れ自身である。その思念の對象たる花は「あゝ」でも何でもない。冷なものである。

複性詞

□これまで挙げて來た名詞動詞副體詞副詞感動詞の五品詞は何れも皆其の詞の有する本然の文法的性能に由つて分たれたもので、皆各一個の性能を有するもの

である。即ち名詞は事物を表はすといふ一性能、動詞は作用を敘述するといふ一性能、副體詞は他の概念の實體に從屬する屬性を表はすといふ一性能、副詞は他の概念の運用に從屬する屬性を表はすといふ一性能、感動詞は主觀的に思念其れ自身を表はすといふ一性能を持つてゐる。其の有する性能は何れも唯一つである。其れ故此の五種は何れも單性詞である。所が詞の中には、一つの詞でありながら二つ以上の性能を持つて居るものが有る。之を複性詞といふ。日本語にはそらいふものは無いが漢文にはある。

歸而謀諸婦。蘇東坡赤壁賦……(歸而謀之於婦)

邦君之妻、君稱之曰夫人、夫人自稱曰小童、邦人稱之曰君夫人、稱諸異邦曰寡小

君。論語季子……(稱之於異邦)

子貢曰我不欲人之加諸我也、吾亦欲無加諸人也。論語公治長……(加之於我、加之於人)

の「諸」は「之」の約音であつて意義も「之」と同じである。「之」は二字で二詞だ。「之」は形式名詞で「於」は前置詞性の動詞で何れも上の動詞へ關係するものであるが「之」

と「於」の間には何等の關係がない。唯位置が相隣してゐるだけである。然るに「之」の二詞が其の音が約まつて「諸」となつた場合には其の職能は「之」と「於」との二つであるにも拘らず、詞は一つである。これを名詞形式名詞と云へば「於」の方の意味が承知しない。これを副詞(前置詞)だと云へば「之」の方の意味が承知しない。之を名詞兼副詞だと云つてはそんな品詞は前述の五品詞中にはない。そこで複性詞といふ一品詞を立てる必要があるのである。こゝにいふ複性詞は英獨佛などにも有る。

There is a book……[*ther is a*]

You mustn't go……[*must not*]

Im Garten gibt es eine Blume……[*in dem*]

Il est un garçon……[*est un*]

の斜字などがそうだ。皆一詞として發音される。

しかし日本語で「善くあり」「書いて置く」が約まつて出來た「善かり」「書いとく」の類は複性詞ではない。それは「善く」と「あり」「書いて」と「置く」は直接に相關係する詞であつて

二概念が統合されて一概念化するから其の性能は二性能が一性能化する。こゝにいふものは次に説明する變態の單性詞であつて複性詞ではない。

變態品詞

單性詞に正態詞と變態詞との二種が有る。

正態詞とは本來の單性詞をいふ。本來唯一つの性能を有するものである。例へば「花」といふ名詞は本來唯名詞的の性能を有し「開」といふ動詞は本來唯動詞的の性能を有する。

變態詞は一詞でありながら二つの性能を有し二性能の一方は一方に從屬して居り一方が一方を統率して全體を代表することに由つて二性能が一性能化されてゐるものである。例へば

送秘書晁監還日本。唐詩選四

の「還」の類だ。「還」は晁監の動作を敘述する點は動詞的であるが其の「送」に對して送られる客體を表はす點は名詞的である。即ち動詞的の性能を材料として作られた

名詞である。動詞的と名詞的との二性能を持つて居つても、その動詞的たる點は材料として名詞的たる點に從屬し、名詞的たる點が動詞的たる點を統率して全體を代表してゐるのであるから、之を全體から觀れば矢張一つの名詞であると云ふことが出来る。決して複性ではなくて矢張單性である。併し其の内部には材料として動詞的の性能が潜んで居るから、名詞ではあつても動詞性名詞である。こゝにいふ品詞を變態品詞といふ。

一 子焉而不父其父、臣焉而不君其君。韓愈原道

の「は」は名詞的の性能を含んでゐる動詞である。子、父、臣、君といふ事物を表はす點は名詞的の性質であるが而も

二 與人爲子而不以其父爲父、與人爲臣而不以其君爲君

と同義で「の」の「子」は「臣」は「三」の「爲子」爲臣に當り「の」の「父」は「三」の「爲父」爲君に當るのである。皆「爲」或は「爲」の意味に使はれてゐる。そうして名詞的意義は材料であつて「爲」或は「爲」といふ動詞的意義が代表的意義であるから、「は」は名詞ではなくて名詞性動詞だ。これも矢張變態品詞である。

子張問政。子曰居之無倦。行之以忠。

論語類編

子曰古之學者爲己。今之學者爲人。

同義問

の「以爲」が單に「以て爲に」の意ならば副詞であるが、これは「以てする」の意爲にするの意であるから副詞的意義を材料にした動詞である。之を副詞性動詞といふ。こゝも變態品詞である。

變態詞は一詞が二詞と同様の性能を持つてゐる。併しその二つの性能の中一方が他の一方を統率して全體を代表してゐるのであるから二性能が一性能化される。其れ故品詞別は其の代表的性能に由つて之を定めることが出来る。即ち動詞性名詞は名詞であり、名詞性動詞は動詞である。兩品詞の合の子ではない。彼の複性詞とは譯が違ふ。

六品詞の分類的精神

□名詞、動詞、副體詞、副詞、感動詞、複性詞の六品詞は漢文とか英語とか日本語とかいふ或る種類の國語にのみ妥當なる特殊のものではなく、世界の凡ゆる國語に共通

普遍、一般的の而も根本的なる範疇である。時の古今將來、宇宙の上下四方を問はず、凡そ言語と稱すべきものは此の六品詞以外に出でることの有るべからざるものである。但し凡ゆる國語が此の六品詞の全部を有するといふのではない。現に日本語の如きは複性詞を持たない。唯、六品詞以外の品詞は何處にもないのである。

此の六品詞は詞を直に六分したものではなく、兩分法を重ねて始めて到著したものである。

詞の分類は詞の性能に由つて分類するのである。若し一詞が必ずたゞ、一つの性能を有するものならば詞の種類は即ち性能の種類と一致する譯だが、一詞が二性能を有するか二詞が一性能を有する様な場合が有ればそうはいかない。

そこで詞と性能との關係を検するに二詞が一性能を有するといふ様な場合はない。併し一詞が二性能を有し二詞と同様の効果を成す場合はある。其れ故先づ詞を二分して單性詞、複性詞の二種とし、複性詞を一つの品詞とする。

單性詞は一詞が一性能を有するものであるから單性詞の分類は性能の分類と一

致する。

言語は思念を表はすものであるが、その中には思念を介して思念の對象を表示するのと思念それ自身を表示するのとある。そこで單性詞を二分して主觀詞と概念詞との二種とする。主觀詞は思想者が思念それ自身を表はすものである。火事を見て「やあ火事だ」と云つた時の「やあ」は火事だと思つた驚嘆そのものであつて、其の驚嘆の内容は「火事だ」といふ客觀的事件に存する。「やあ」はこの内容を表はすのではなく驚嘆そのものを表はすのである。此の主觀詞を感動詞と名づけて一品詞とする。

概念詞は思想の材料なる概念を表はすものである。主觀的存在としての概念そのものの表示ではなくて客觀的存在としての對象の表示である。「山」と云へば心内の「山」を指すのでなくて外界としての山を指すのである。

概念は内包、外延の二面より觀ることが出来る。凡そ宇宙の凡ゆる現象は吾人に認識されて概念となる上に於て内包と外延との二面がある。凡ゆる事物の持つて居る屬性と作用とは内包である。「雪の白いこと、冷たいこと、水の結晶たる細層

より成ること、軽くして飛散して空中より降つて地上に積ること等は雪の内包である。併しこれらの内包だけでは雪といふ事物は成立しない。これが雪たるには此等の諸性質及び作用を統一して支持する力がなければならぬ。此の内包の支持者を外延といふ。それは雪の様な有形物ばかりではない。藝術とか宗教とか信用とか戦争とかいふ様な無形物でも同様である。概念は外延性の有無に由つて、有外延性概念、無外延性概念、純内包性概念の二つに分たれる。そこで概念詞は同様、有外延性概念詞と無外延性概念詞との二つに分たれる。

□有外延性概念詞は外延性を有する概念を表はすものであつて吾人は之を名詞と名づける。名詞は大抵外延性と内包性とを兼ね有するものである。例へば前例の「雪」の説明でも分るであらう。たゞ「者」といふ名詞は外延性だけで内包性がな

い。

一 雪是物也。

二 雪是者也。

(一)の「物」は内包外延を兼ねてゐるから完備した概念である。それだから(一)の命題は有意義であるが、(二)の「者」は内包が無いからその概念は不完備である。唯事物としての形式的意義が有るに過ぎない。随つて(二)の命題は意義を成さない。

雪是白而冷者也。

の「者」は内包を缺いてゐる。白而冷といふ内包の補給に由つて始めて「白而冷者」といふ内包外延を兼ねた概念を表はすことになる。

名詞以外の概念詞は皆無外延詞即ち純内包詞である。

一 雪是物也。……………
有外延的斷定

二 雪是白而冷者也。……………

三 雪白而冷。……………
純内包的斷定

の(一)(二)の——は有外延詞で(一)は單詞的名詞(二)は連詞的名詞であるが、(三)の——は無外延詞である。(一)(二)の——は雪に就いて其の内包と外延とを説明してゐるが(三)の——は雪に就いて其の内包だけを説明してゐる。

無外延詞は内包ばかりで外延のない概念を表はすものである。そうして内包の

概念は、判定性を持つてゐるか居ないかに由つて、作用の概念と屬性の概念とに分たれる。

一 富士山頗高。 黃河水不清。

雨自天降。 地球周大陽

二 各學生皆穿制服。 我寧廢學乎

の(一)の●は皆作用を表はすもので判定性がある。「高」はその概念を富士山の概念の内包と比較し其の一致不一致を判定して一致を斷じ、「不清」は其の概念を黄河に比較して其の不一致を斷じてゐる。判定性は即ち一致不一致の判斷を下す性質である。判定性は概念に存する性質であるが、言語の性質としては之を敘述性といふ。(二)の○は唯屬性を表はすだけで判定性(敘述性)を持つてゐない。

そこで無外延詞は之を分けて判定詞(作用詞)と非判定詞(屬性詞)の二つとする。前者は判定性ある内包的概念即ち作用の概念を表はすものでこれを動詞と名づける。右の(一)の●はそらだ。

非判定詞(屬性詞)は判定性のない概念即ち屬性の概念を表はすものである。屬性

は本體に從屬するもので單獨に存するものではない。「富士山頗高」の「頗」は「高」に屬する程度であつて「高」を本體とする屬性である。「頗」だけ單獨に考へては具備した概念にはならない。之に反して「高」は獨立性がある。「山高鳥飛」と云へば「高」が富士山に從屬するのではなく富士山が「高」に從屬するのである。「山高」も「屋蓋高」も「梢高」も「樓高」も皆「高」の一種である。山、屋蓋、梢、樓は「高」の主體を區別する補助に過ぎない。この「高」飛などは判定詞即ち動詞であつて作用を表はすものである。所が屬性の概念は獨立性がないから必ず他の概念へ從屬する。而してその從屬に二種ある。一は他の概念の實質へ從屬し一は他の概念の運用へ從屬する。前者を連體と云ひ、後者を連用といふ。そこで屬性詞は連體屬性詞と連用屬性詞との二つに分たれる。連體屬性詞は之を副體詞と名づけ、連用屬性詞は之を副詞と名づける。例へば「諸學校各學生其教師の諸各」の類は他の概念なる「學校學生教師」その物へ從屬するが「頗高最長嘗言之の頗最嘗」などは他の概念なる「高長言」の運用へ從屬する。六品詞は右の様な順序に由つて逐次兩分法を重ねて得た結果である。之を圖示すると次の様になる。



第二節 名詞の小分

名詞の四種

名詞を分けて本名詞、代名詞、不定名詞、形式名詞の四種とする。

本名詞 本名詞は直接に實質的意義を表示する名詞である。常に變動しない實質的意義を持つて居る名詞である。例へば「鳥獸」「山海聲色」「政治法律」「日本支那論」「孟子」などの類だ。何人が用ゐても「鳥」と云へば鳥を指し、「獸」と云へば獸を指し、その實質的意義は變らない。之に反して「我」「汝」の如きは孔子が「我」と云へば孔子を指し、孟子が「我」と云へば孟子を指すと云ふ様に其の實質が變る。又「誰」などは實質

的意義が不定であるし「者等」などは實質的意義が無い。そういふものは本名詞ではない。

矣

世間で名詞と稱するものは大體に於て本名詞である。

代名詞 代名詞は或る基準を設け其れとの關係に由つて指示的に間接に實質的意義を表示するものである。其れだから實質的意義は持つて居るが場合々々に由つて變動する。例へば「我汝彼此」の類だ。「我」に實質的意義は有るが、太郎が用ゐれば太郎のことになり、次郎が用ゐれば次郎のことになるといふ様に其の指す所が變動する。變動はするがその指示に由つて其の時だけは一時定まる。

不定名詞 不定名詞は實質的意義の定らない名詞である。「何誰孰幾何某若干」等がそうだ。この中「何誰」などはその不定な實質的意義の定まるべきことを豫想或は要求する。之を疑問といふ。「某若干等」は不定を不定のままにして其の定まるべきを豫想しない。之を不問といふ。

□世間の普通の本では不定名詞は代名詞の一種とされてゐるが私はそれはいかんと思ふ。太郎と定まり次郎と定まれば本名詞である。我と定まり汝と定まれ

ば代名詞である。併し「何誰」と云つては未定であつてその定まることは太郎次郎と定まることを豫想する場合も「我汝」と定まることを豫想する場合も有るのであるから、本名詞代名詞の何れへも入れられないものである。

本名詞代名詞不定名詞の三種は何れも實質的意義が有るからみな實質名詞である。この實質名詞に對して次の形式名詞が有る。

形式名詞 形式名詞は形式的意義が有るだけで實質的意義の無い名詞である。

これは日本語には「者」こと「方」奴「者」譯「等」積り爲「所」所以「中」儘など非常に澤山有るが漢文には「者等與及之」などが有るだけだ。

子曰道不行乘桴浮於海從我者其由也與。論語公冶長

今太后擅行不顧種侯出使不報華陽涇陽等擊斷無諱。史記范雎列傳

右の「者」は人を指すが、實質的意義が無い。たゞ「者」だけでは意義が具備しないから上の「從我」て之を補充する。「等」も人を指すが實質的意義がないから「等」だけでは分らない。そこで上の「華陽涇陽」て之を補充する。

「者」は訓は「もの」である。「しや」と讀むと不完辭になるから形式名詞としての直譯は

「もの」でなければならぬ。「來者去者」などを「來るもの」「去る者」と讀まずに「らしいしゃ」など、讀むと直譯にはならぬ。「等は」「ら」と讀むと不完辭になる。文法的直譯は「らでなく」と「或は」などである。

形式名詞といふ語は私の新造である。世間では形式名詞といふものを一向考へて居らない様だ。英文典などでは *Either, Neither, Both* 等を代名詞の中へ入れてゐるが、其れは形式名詞といふ名稱がないから自然そうなたたので實は形式名詞である。

詞の二大別と實字虚字 名詞を本名詞、代名詞、不定名詞、形式名詞と四種に分けることは上述の通りであるが、この本代、不定、形式の四別は名詞だけでなく動詞でも副體詞でも副詞でも感動詞でも皆同様である。されば詞を大別して一方で名詞、動詞、副體詞、副詞、感動詞、複性詞の六品詞とする他方では詞を大別して本詞、代詞、不定詞、形式詞、複性詞の五種とすることが出来る。この兩分類は縦横の關係を成すもので一方を大別とすれば他の一方が小別になるので、どちらを大別としても善いのである。例へば名詞に本名詞、代名詞、不定名詞、形式名詞の四種が有るとい

ふことも出来、本詞に本名詞、本動詞、本副體詞、本副詞、本感動詞が有ると云ふことも出来るのである。

本詞、代詞、不定詞の三つは實質詞である。されば詞を大別すれば實質詞と形式詞となる。西洋の言語學者は詞を觀念詞と關係詞との二つに分けるがこれは不合理である。何となればこの二種の中に入れられないものがある。形式詞中の關係詞でないもの例へば形式名詞の「者」等、形式動詞の「可」被「Shall」「Will」などの類は觀念詞へも關係詞へも這入らない。然るに東洋では漢學者は詞を實字、虚字の二つに分けた。これは實に合理的である。實字は即ち實質詞で虚字は即ち形式詞である。勿論人に由つて實字虚字の區別に多少の異同は有るが、虚實と分けた精神から言つて實字虚字の解は實質詞形式詞としての區別でなければならぬ。

代名詞獨立の不可 從來の文法書は名詞代名詞を對等の二詞としてゐるが、それは種々の點に於てよくないと思ふ。今その理由を次へ述べる。

一形式名詞を所謂名詞の中へ入れるとすれば、所謂名詞とは本名詞と形式名詞の二つをいふのであつて、其れには一貫した定義が立たない。事物を名づくるものが名詞だと云

ふが形式名詞は事物を名づくるものではない。

二形式名詞を名詞の中へも代名詞の中へも入れずに而も形式名詞といふ一品詞を立てないとすれば「者」の如きものが品詞から洩れて仕舞ふ。

三連詞の中には「國家及我」といふ様なものがある。名詞代名詞を別々の品詞とするとすればこゝろいふ連詞は連詞的名詞か連詞的代名詞かといふ面倒な問題が生ずる。

四動詞にも本動詞代動詞等の別が有る。代名詞を一品詞として代動詞を一品詞としないことは不合理である。

所謂る名詞と代名詞とは多少の相違はあつても其の事物を表はす點は同一であつて連詞又は斷句中に於ける文法的效力に致つては全く同じである。品詞としては同品中に置かれなければならない。これを別々の品詞とすることは全く謂れないこととてあると同時に形式名詞の處置に困ることになる。

本名詞の小分 其一

本名詞を分つて固有名詞、普通名詞、模型名詞の三つとする。

普通名詞 普通名詞は種類の概念を表はす名詞である。「山河」人獸「犬猫」宗教「法律戰爭」旅行「文詩」等の類がそうだ。山は有形物の種類で、宗教は無形物の種類だ。同種中の各個物に普く通ずる名詞であるから普通名詞といふのである。

固有名詞 固有名詞は個體の概念の名詞である。「堯舜華嶽」江漢老莊儒佛詩書等の類だ。内包が極端に豊富で外延が極端に狭小な本名詞である。

模型名詞 □普通の説では本名詞は唯普通、固有の二種だけだと説かれてゐるが實はもう一つ模型名詞といふべきものがある。

模型名詞は或る材料を以て實物の模型を作つて之を名詞としてその實物を表はすものである。模型の材料が圖形や立體像である場合は讀めないから名詞にならないが、材料が聲音である場合には讀むことが出来るから名詞になる。例へば電話もうるさいものだ。夜中のチリチリチリには參るよ。

のチリチリチリは電鈴の音その物ではない。人間の聲で作つた電鈴の音の模型であつて實物たる電鈴の音を代示するものである。こゝろいふのが模型名詞である。概念を表はすことは表はすが、普通名詞や固有名詞の様に概念を直接に表は

はすのてなく實物の觀念を表はすのであつて概念は間接に表はされる。
漢文でも他人の言語の引用には屢模型名詞が用ゐられる。

經營天下五年卒亡其國身死東城尙不覺悟而不自責過矣乃引『天亡我非用
兵之罪也』豈不謬哉。史記項羽本紀贊

の『……』は模型名詞である。實物は斷句であつても模型として名詞である。

關關雎鳩在河之洲毛傳關關和聲也雎鳩王雎也毛詩

の——は模型名詞である。實物は形容動詞でも名詞でも關係はない。

顏回魯人也字子淵史記仲尼弟子列傳

楞里子者名疾秦惠王之弟也同楞里子列傳

の——は模型名詞である。人を指すならば固有名詞だが此れはその固有名詞を
指すのである。

模型名詞は多くの場合に於ては下へ「者」也者を附ける。

『瑟兮儻兮』者恂栗也『赫兮喧兮』者威儀也大學

『道』也者不可須臾離也可離非道也中庸

孔子者聖之時者也孔子之謂集大成大成集大成也者金聲而玉振之也金聲也
者始條理也玉振之也者終修理也孟子萬章下
の『……』は模型名詞である。「者」はその模型名詞の代示する實物を再示する。「也」
は模型名詞の意を強めるのである。

本名詞の小分 其二

本名詞を分けて絶對名詞、相對名詞の二つとする。

絶對名詞 絶對名詞は具備した概念として他と關係なしに單獨に考へ得る概
念を表はす名詞である。「山河」人獸日本支那舟車政治教育文章詩歌などの類がそ
うだ。

相對名詞 相對名詞は他の概念と相對的にのみ具備した概念として考へられ
單獨に考へては具備しない概念を表はす名詞である。例へば「妻」の如きはそうだ。
妻は夫たる人に對して相對的に妻なのである。夫に對せずして存する妻といふ
ものはない。必ず何人かの妻であるので誰の妻でもない唯妻であるといふ様な

絶對の妻はなり。

相對名詞には種々ある

一、所有物として所有者に相對的なるもの、例へば次の「」の類がそうだ。

某之「妻」

某之「子」

某之「君」

某之「臣」

某之「朋友」

某之「敵」

刀子之「柄」

刀子之「鞘」

器物之「蓋」

茶碗之「縁」

二、作用として主體客體に相對的なるもの

物之「販賣」

物之「購買」

動物之「保護」

牛馬之「屠殺」

夷狄之「朝貢」

文化之「發展」

敵國之「降服」

子弟之「留學」

三、方位として事物に相對的なるもの

東山之「上」

燈火之「下」

學校之「前」

旅館之「後」

荒服之「外」

城郭之「内」

窓戶之「隙」

岩石之「罅」

考試之「前日」

入學之「翌日」

君臨之「三年」

即位之「五年」

四、性質として事物に相對的なるもの

文章之「上乘」

物之「凡品」

蝴蝶之「卵」

孔雀之「雛」

五、範圍として事物に相對的なるもの

財産之「全部」

資本之「一部」

朋友之「一人」

國民之「多數」

兵「百萬」

車「千乘」

相對名詞は單獨には具備した概念を表はすことが出来ないものであるから、其れ

を断句の中に用ゐるには他語を以てその相對の基準を示すことが必要である。その相對の基準を示すものを相對名詞の補充語といふ。右の例の「」の上に在るものは「」に對する補充語である。

本名詞に於ける絶對名詞、相對名詞の別は其の名詞としての固有の性能である。其の運用上の副性より言へば、相對名詞も絶對化する場合があります。絶對名詞も相對化する場合があります。そのことは詞の運用に關する問題であるから第二章第一節に述べることにする。

代名詞の小分

代名詞は「我」「汝」「彼此」の様な類で、或る基準に由つて指示的に間接に事物を表示するものである。そうしてその實質的意義は場合場合に由つて一定しない。代名詞の主要なものは人稱代名詞、位置代名詞の二種であるが、その外にも種々ある。

人稱代名詞

人稱代名詞は説話者が自己を基準として人を指示する代名詞である。「我」の如く自己を指示するものを第一人稱と云ひ、「汝」のごとく説話の對者を指示するものを第二人稱と云ひ、「彼」の如く説話者、聽話者以外の人を指示するものを第三人稱といふ。

第一人稱には「我」の外に「吾」「余」「予」「僕」「朕」「寡人」「不穀」「孤」「不肖」「愚」「小子」「妾」などがある。

「我」は最も一般的な語で尊卑の意が無い。「吾」も同様であるが「彼」「我物」「與我」「吾人」などの如く用ゐられて「我」は彼或は物に對し、「吾」は他人に對する様な味がある。「余」と「予」とは同義だ。微弱ながら謙稱である。「朕」は天子の専用、「寡人」「不穀」「孤」は諸侯の専用、「妾」は女子の専用である。「台」は極古く尙書などに用ゐられただけである。音が「怡」で「予」の通音だらうといふ。この外「臣」「兒」「鄙人」「生」等の本名詞が代名詞化して用ゐられるものがある。

第二人稱には「汝」の外に「女」「爾」「乃」「若」等がある。名詞より轉じたものに「子」「吾子」「兄」「公」等がある。「君」「足下」「先生」「大人」「閣下」「殿下」「陛下」等の名詞も代名詞化して用ゐられるが、これは第三人稱なる場合もある。

「女は汝」と同音で全く同じだ。「而」と爾とも同音だが、汝の類音であつて「汝」と同語源だ。「而」と乃とは多く「なんぢの」といふ意の時(連體格)に用ゐられる。或る本に「而」と乃は必ず名詞の上に置かれ「なんぢの」の意に用ゐられると書いてあつたが、そうは限らない。例へば

且而與其從辟人之士也。豈若從辟世之士哉。論語微子

王曰而敢來何也。左傳昭二十、三月

夫差志復讎朝夕臥薪中出入使人呼曰夫差而忘越人之殺而父邪。十八史略吳

王若曰君牙乃惟由先正舊典時式民之治亂在茲。周書君牙

の様な例が有るのである。併し大抵は「なんぢの」の意に名詞の上に用ゐられてゐる。

第三人稱には「彼」「渠」「夫」「他」が有る。「彼は」最も普通に用ゐられる。「渠」は俗語で多少侮る意が有る。「夫」は「彼」と類音であるが稀に用ゐられてゐる。「他」は後世の俗文に用ゐられる。

位置代名詞

位置代名詞は説話者自身を基準とし位置に由つて事物を指示する代名詞である。「此」「斯」「彼」「是」の五詞がそうだ。位置代名詞に近稱、遠稱、中稱の三種がある。日本語には中稱がなく、其の代りに近稱に第一近稱、第二近稱の二種があるから、日本人が漢文法を研究するには此の別を知らなければならぬ。

近稱 近稱は自己の位置へ近いものを指す稱であつて「此」「斯」「茲」等がそうだ。「是」は中稱であつて近稱ではなく、之は形式名詞であつて代名詞ではない。「此」「斯」は有形無形に拘らず博く一般の事物を指すものである。

其言道徳仁義者不入于楊則入于墨、不入于墨則入于老、不入于老則入于佛、入于彼必出于此、入者主之出者奴之。韓愈原道

屈原既放遊於江潭、行吟澤畔、顔色憔悴形容枯槁、漁夫見而問之曰、子非三閭大夫與、何故至於斯。屈平漁夫辭

客亦知夫水與月乎、逝者如斯而未嘗往也、盈虛者如彼而卒莫消長也。蘇東坡前赤壁

王立於沼上。顧鴻雁麋鹿。曰賢者亦樂此乎。孟子對曰賢者而後樂此。不賢者雖有
此不樂也。 孟子梁惠王

王好戰。請以戰喻。填然鼓之。兵刃既接。棄甲曳兵而走。或百步而後止。或五十步而
後止。以五十步笑百步。則何如。曰不可。直不百步耳。是亦走也。曰王知此。則無望
民之多於鄰國也。 同

月明星稀。烏鵲南飛。此非曹孟德之詩乎。 蘇東坡赤壁賦

刑入於死者。乃罪大惡極。此又小人之尤甚者也。 歐陽修縱囚論

斯道也何道也。曰斯吾所謂道也。非向所謂老與佛之道也。 韓愈原道

太宗之爲此。所以求此名也。 歐陽修縱囚論

「此」と「斯」は有形無形に拘らず汎く事物を指すに用ゐるが「此」は普通の「これ」であつて
特殊の意はない。「斯」は幾分か事物を状態として取扱ふのである。「此」も「斯」も「これ」
と訓するのであるが「如此如斯」といふ場合は「かくのごとし」と讀む。それは日本語
の「ごとし」に名詞性があるからである。漢文には關係はない。「茲」は「此」と同音で

極古くは「此」と同様に用ゐられた。

禹曰朕德罔克。民不依。阜陶邁種德。德乃降黎民。懷之。帝念哉。念茲在茲。釋茲在茲。
名言茲出。茲允出。茲在茲。惟帝念功。 虞書大禹謨

維昔之富不如時。維今之疚不如茲。 毛詩大雅蕩召旻

普通は場所を表はす場合(時をも場所として見る)にのみ用ゐる。「こゝ」と讀む。

太宗施德於天下於茲。六年矣。 歐陽修縱囚論

愈縻於茲。不能自引去。資二生以待老。 韓愈送溫處士序

子畏於匡。曰文王既沒。文不在茲乎。 論語子罕

「此」は又副體詞として「この」の意に用ゐられ副詞として「こゝ」の意に用ゐられ
る。(第四節)

遠稱 「彼」は自己の位置に遠いものを指す詞である。之を遠稱といふ。「彼」は人
稱代名詞の場合我汝以外の人格を指すので遠近などの意はなく「彼我」の「彼」の意
であるが位置代名詞の場合は近稱の「此」に對する遠稱であつて「彼此」の「彼」である。
近世の俗文では「我」に對して「彼の代に」他と云ひ「此」(這個)に對しては「彼の代に」耶個と

「彼」は第三人稱の場合も遠稱の場合も「かれ」と讀むが、遠稱の場合には「かれ」と讀んでも「あれ」の心持で讀むのである。「彼」は副體詞の場合がある。その場合には「彼國」「彼地」などの様に「かの」と讀む。

中稱 「是」は遠近を定めずに事物を指示するもので之を中稱といふ。日本語の「それ」に近い意味を持つてゐるが少し違ふ。

日本語との比較 □日本語の位置代名詞には第一近稱(これ)、第二近稱(それ)、遠稱(あれ)の三種がある。第一近稱(これ)は自己へ近いものを指し第二近稱(それは)對者へ近いものを指す。例へば自己の手に持つてゐる物は「これ」と云ひ、對者の手に持つてゐるものは「それ」と云ひ、兩方へ遠いものは「あれ」といふ。世間の文法書の多くは「それ」を中稱と稱し、遠近の中間に在るものを指すといふが、其れは誤である。物の遠近は程度の問題であるから一定の區別は出來ない。遠近の中間の物は日本語では中間と見ずに、自分へ近いと見るか對者へ近いと見るか一方にきめて「これ」とか「それ」とかいふのである。然るに漢文には中稱が有つて第二近稱が無い。漢

文の近稱(此)は第一近稱であるから對者に近い物へは使はない。對者に近いものは遠稱(彼)を使ひ又は中稱を使ふ。但し對者へ近いものと遠方の物とを對照していふ時には、遠方の物に遠稱を使ふから對者へ近いものは近稱を使ふことになる。そこで漢文の「此」「彼」は日本語の「これ」「あれ」に當る場合と「これ」「それ」に當る場合とある。近時の俗語では中稱が無くなつて近稱(這個)遠稱(那個)の二つとなつた。唯山東省の一部に「セ個」といふ語がある。「セ」は俗字で中稱だ。

まう一つ注意することは日本語で遠稱を使ふ事物は必ず自己も對者も共に知つてゐる事物に限ることである。孰方か一方が知らなければ遠稱は使はない。然るに漢文には第二近稱(それ)が無くその代りに中稱がある。日本語で第二近稱(それ)を用ゐる處は漢文では中稱(是)を用ゐる場合と近稱(此)を用ゐる場合と、稀には遠稱(彼)を用ゐる場合がある。又日本語で近稱(これ)を用ゐる處は漢文は近稱(此)を用ゐるが中稱(是)を用ゐることもある。これが漢文と日本語と代名詞の用法の一致しない點である。日本で中稱の漢字(是)へ訓を附けるには日本には中稱の語がないから第一近稱(これ)を用ゐた。前後の關係を視て第一近稱(これ)と第二近稱(それ)

とに読み分けることが困難であつたからである。

□「是はこれ」と近稱に讀んでも實は中稱であるから「此」とは用法が違ふ。吾々はこの點に注意しなければならぬ。「是は何を指すか」といふとそれに二種ある。一は前言の内容で二は何でも適當な事物である。先づ第一の用法の例をあげる。

項籍唯不能忍。是以百戰百勝而輕用其鋒。蘇東坡留侯論

當淮陰破齊而欲自王。高祖發怒見於辭色。由是觀之。猶有剛強不能忍之氣。同

不用其言而弑其所立。羽之疑增必自是始矣。同范增論

挾太山以超北海。語人曰我不能。是誠不能也。爲長者折枝。語人曰我不能。是不爲也。非不能也。孟子梁惠王

然則夫子既聖乎。曰惡。是何言乎。昔者子貢問孔子曰。夫子聖乎。孔子曰。聖吾不能。同公孫丑

——王曰。吾惛不能進於。是夫子輔吾志明教我。同梁惠王

取之而燕民悅。則取之。古之人有行之者。武王是也。取之而燕民不悅。則勿取。古之人有行之者。文王是也。同

孟子曰。聖人百世之師也。伯夷柳下惠是也。孟子盡心下

の「是」は前言——の内容を指すのである。この「是」を近稱「此」に代へても善いが意味の具合が違ふ。「是」を用ゐれば「是」は前言の内容を指すのであるが「此」を用ゐれば前言の内容をそのまゝ、前言の内容として指すのでなく、それを一つの實物として指すのである。

月明星稀。鳥鵲南飛。此非曹孟德之詩乎。西望夏口。東望武昌。山川相繆。鬱乎蒼々。此非孟德之困於周郎者乎。蘇東坡赤壁賦

などがその例だ。前言——は實物の代りである。「此」は實物を指し「是」は前言を指す。實物は遠近を定めることが出来るから近ければ「此」を用ゐ、遠ければ「彼」を用ゐる。前言の内容は遠近がないから中稱「是」を用ゐる。前言の内容でも之を實物とし取扱へば自分へ近いと見て「此」といふ。

□次に第二の用法では「是」は遠近を定めずに適當なものを指す。有形物ならば遠近が有るから「此」「彼」であるが無形物では遠近がないから、中稱を用ゐるのである。

彼人也。予人也。彼能是。而我乃不能是。韓愈原毀

一善易修也。一藝易能也。其於人也。乃曰能有是。是亦足矣。曰能善是。是亦足矣。

同

博愛之謂仁。行而宜之之謂義。由是而之焉之謂道。

同原道

「彼能是の」是は何を指すか。何といふことはない適當なる藝を考へれば善いのである。文なら文、詩なら詩、經なら經、何でも彼の出来るものを指すのである。そういふ場合に遠近の定めやうは無いから中稱を用ゐる。

□日本語では「此れは此う彼れはああ其れは其れ、此れは此れ」といふ風に「此れ彼れ」と對する場合と、其れ此れと對する場合とあるが、漢文でも「彼此」と對する場合と、「是此」と對する場合とあるのである。「入于彼者出于此」などは彼此の對であるが、

天下之人聞執事之於愈如是也。必皆曰執事之好士也。如此執事之待士以禮如此。此。韓愈上張僕射書

などは「是此」の對である。以て「是がこれかく」と讀んでも近稱でなくて中稱であることが分るであらう。

「是は、そうある状態を指すのであるから場合を指すことがある。そういふ時には「これ」と讀まずに「こゝ」と讀む。口語譯では「そこ」といふべきである。「於是は」そこでである。又「如是は」かくのごとし」と讀むが口語譯は「そんなさういふその通りであつて、如斯如此が、こうこんなこの様の意であるのとは違ふ。

「是は、そうある状態を指すのであるから代名詞としては「それそこ」といふのに近いが、「此彼」と違ひ有形物を指すのでないから轉じて副詞となり又動詞ともなつた。そうしてこの場合には其の否定には「非」が用ゐられる。「色卽是空、誰是長年者、豎刁易牙、開方三子、非人情」などの「是非」は副詞で、「實迷途其未遠、覺今是而昨非」などの「是非」は動詞だ。

種々の代名詞

代名詞は直接に事物を表示せず、或る基準との關係に由つて間接に之を指示するものである。人稱代名詞と位置代名詞の二種は說話者が自己を基準として事物を指示するものであるから、之を説話代名詞といふことが出来る。併し代名詞にはこの外に説話以外のものを基準とする代名詞がある。

「己」の如きは動作を基準としてその動作の主體を指すものである。例へば「恐民不信己」と云へば「己」は恐れる人を指す。「己未有善」と云へば「己」はまだ一善を有しない人を指す。「人皆出乎己者反乎己」と言へば「己」は其の大主なる人を指す。
「甲子乙丑」などの類も干支そのものを指さずに之に由つて其の歳を指す場合は順序の代名詞である。「如左如右」などの「左右」も方向そのものを指すのではなくその方向に在る事物を指すならば方向の代名詞である。

不定名詞の小分

不定名詞は實質的意義の不定なる名詞である。例へば「何幾何誰孰疇某若干」などの類だ。

不定名詞は皆實質的意義が不定であるが、實質的意義がないのではない。唯分らないだけで、有ることは有るのであるから、形式名詞の様に全然實質的意義の缺けて居るのは違ふ。又不定名詞は實質的意義が不定であつて、指示に由つて實質的意義が定まるものではないから代名詞ではない。例へば代名詞「我」は太郎が用

ゐれば太郎を指し次郎が用ゐれば次郎を指すと云ふ様にその場合々々で實質的意義が定まるが、不定名詞「誰」は人が分らないから誰といふのでその指す所は何處までも分らない。

不定名詞の中「何幾何誰孰疇」等はその意義が不定ではあるが其の定まるべきことが豫想されてゐる。例へば

梁惠王……卒然問曰天下惡乎定吾對曰定于一孰能一之對曰不嗜殺人者能一之孰能與之對曰天下莫不與 孟子梁惠王

の「孰」といふのは人が分らないから不定に言ふので數學的に云へばXで假に其の人を表はすのであるが、而もその人の定まるべき豫想を持つてゐる。そうして單に豫想を持つてゐるだけならば之を「疑」と云ひ、豫想だけでなく豫想の實現を豫期する場合即ち答を持つ場合は之を「問」と云ひ、「疑」と「問」とを合せて疑問といふ。「何誰幾何孰」等は疑問名詞である。所が又

嘗試語於衆曰某良士某良士其應者必其人之與也 韓愈原毀
などいふ「某」は人が分らないのを分らない儘にして置くのでXではあるがその定

るべき豫想を持つて居ない。こういうのを不問といふ。「某若干は不問である。疑問名詞の中「何幾何は種類の疑問で本名詞ならば普通名詞に該當する。「誰孰焉」は個體の疑問で本名詞ならば固有名詞に該當する。區別して命名したならば汎稱的疑問、個別的疑問とでも云ふべきであらう。

「何は不定名詞たる場合よりは副詞、副體詞たる場合が多い。

小子後生於何考徳問業。韓愈送温處士序

王曰何以利吾國大夫曰何以利吾家士庶人曰何以利吾身上下交征利而國危。

孟子梁惠王

の「何は不定名詞であるが

1 孟子對曰王何必曰利。孟子梁惠王

2 曰伯夷叔齊何人也曰古之聖人也。論語述而

の(1)の「何は副詞で「なんぞ」と読み、(2)の「何は副體詞で「いかなる」と読む。但し日本語の「いかなる」は形容動詞である。「焉」は代名詞たる場合は「これ」副詞たる場合は「いつくんど」であるが不定名詞たる場合は「いづこ」である。

皎々白駒食我場苗。繫之維之以永今朝。所謂伊人於焉。逍遙皎々白駒食我場藿。

繫之維之以永今夕。所謂伊人於焉。嘉客。詩經小雅

「焉」は極古く尙書などに見えてゐるだけである。

形式名詞の小分

形式名詞は形式的意義が有るだけで實質的意義がないものであるから、其の實質的意義は他語に由つて補はれなければならない。その之を補ふ語を補充語といふ。形式名詞は、其の如何なる補充語に由つて如何に補はれるか、その補はれ方に由つて之を分けて單純形式名詞、寄生形式名詞の二種とする。前者に屬するものは「者等」の二つで後者に屬するものは「之焉諸」の三つである。「所」も形式名詞的意義はあるがこれは形式副詞的意義もあるから複性詞である。

單純形式名詞

單純形式名詞は單純なる補充語に由つてその實質的意義の補はれる形式名詞で

ある。單純なる補充語とは唯形式名詞に對して補充語であるだけで別に何等の役目を持たないものである。例へば「知吾者」の「者」は形式名詞であつて「知吾」は「者」に對して單に補充語であるだけで別の役目はない。唯「者」だけでも既に一つの名詞であるが、實質的意義を補ふために「知吾」が附いたのである。日本語では「吾を知る者」といふ「知る」は第四活段であつて連體格であるから名詞を修飾する役目を持つてゐる。其れ故「吾を知る」を單純なる補充語といふことは出来ない。併し漢文では「知吾」の「知」は所謂不定法實質形であつて連體格でも何でもない。

「者」は事物の概念の形式的意義意義とは效果のことであるを表はす名詞で用法が種々ある。

一「者」は作用の主體を指す。

皆好其聞命而奔走者。不好其直己而行道者。聞命而奔走者。好利者也。直己而行道者。好義者也。未有好利而愛其君者。未有好義而忘其君者。韓愈上張僕射書
先聞此聲者。其國必削。韓非十過
古之聽清徵者。皆有德義之君也。同

凡人主之國小而家大權輕而臣重者。可亡也。韓非子亡徵
夫富者苦身疾作。多積財而不得盡用。其爲形也亦外矣。莊子至樂
吾聞之。可與行者。與之至於妙道。不可與往者。不知其道。同漁夫
「者」の意義は形式的であるが、その實質的意義は其の上にある作用を表はす語に由つて補はれる。

作用の主體に大小の主體の有る場合がある。そらういふ場合に「者」が大主體を表はすことが有る。例へば

親臣進而故人退。不肖用事而賢良伏。無功貴而勞苦賤。如是則下怨下怨者。可亡也。韓非子亡徵

「怨」の主體は「下」であるが、その大主體即ち「下怨全體」の主體は「國」である。右の例の「者」は「怨」の大主體なる「國」を指すのである。

以上の例は「者」の上に在つて「者」の意義を補充する語が動詞であるが、それが名詞たる場合も有る。「王者。霸者。仁者。智者」などはその例だ。こらういふ場合の上の名詞は敘述態第二章第一節であるから動詞と同様の効果が有る。

角者吾知其爲牛。鬣者吾知其爲馬。韓愈獲麟解

の「角」などは名詞性動詞である。

二「者」が作用の客體を表はす場合

其妻告其妾曰、良人出則必饜酒肉、而後反問其與飲食者、盡富貴也、而未嘗有顯者來、吾將闢良人之所之也。蚤起、施從良人之所之、徧國中、無與立談者。孟子離婁

凡執事之擇於愈者、非爲其能晨入夜歸也、必將有以取之。韓愈上張僕射書

右の例の「者」は——の動作の客體を表はす。こういう場合に作用を表はす語の上に「所」が有ると「者」が客體を表はすことが明確になる。それは「所」が客體を表はす語であつて「者」が「所」と同じ物を表はすからである。例へば

其良人出則必饜酒肉、而後反。其妻問所與飲食者、則盡富貴也。孟子離婁

所恃者司馬也、而司馬又醉如此。韓非子十過

寡人之所好者音也、願試聽之。同

苟有以取之、雖不晨入夜歸、其所取者猶在也。韓愈上張僕射書

昔者堯有天下、飯於土、羹飲於土、鋼其地、南至交趾、北至幽都、東西至日月之所出入者、莫不賓服。韓非子十過

この場合「者」はその上の——なる動作の客體を表はすが、其れは間接にそうなるので「者」の意義を補充する語は實は上の「所」である。「所」は事物を指すので「者」は「所」を指すのだから嚴密に言へば上に「所」の有る場合は次の方にある「」の用法である。この「三」の用法の中に次の様ながある。

天其運乎、地其處乎、日月其爭於所乎、孰主張是、孰綱維是、孰居無事、推而行是、意者其有機緘而不得已耶、意者其運轉而不能自止耶。莊子天運

語之至者、臣不敢載之於書、其淺者又不足聽也、意者臣愚而不概於王心邪。史記范雎列傳

記范雎列傳

この「意者」を「おもふに」と訓ずるが文法的に言へば「者」は「思ふ」の客體であつて何と意ふか其の意ふ所を指すのである。日本語で云へば「思ふのに」の「の」に當るものである。

三「者」が原因理由を指す場合

上曰吾將西遷者欲據山河之勝而去冗兵十八史略宋太祖

虞公之兵殆而地削者何也韓非子十過

天下有明主則諸侯不得擅厚者何也為其割榮也史記范雎列傳

この場合に上の動詞の上に「所以」が有れば「者」の意義が明確になる。

麟之所以為麟者以德而不以形韓愈獲麟解

これは「者」は——なる作用の理由を表はす。併し上の「所」といふ詞の表はす事物を指すのであるから嚴密に言へば次の「正」の用法である。

四「者」が方法物を表はす場合

丘之所以說我者若告我以鬼事則我不能知也莊子盜跖

如此者非愈之所能也抑而行之必發狂疾上無以承事於公忘其將所以報德者下無以自立喪失其所以為心韓愈上張僕射書

「者」が——なる動作の方法物を表はすのであるが嚴密に言へばこの用法は次にある「正」の用法である。何となれば上の「所」が事物を表はし「者」は「所」を指すのだからである。

五「者」が事件その物を表はす場合

子房不忍忿々之心以匹夫之力而逞於一擊之間當此之時子房之不死者其間不能容髮蓋亦已危矣蘇東坡留侯論

非有平生之素卒然相遇於草野之間而命以僕妾之役油然而不怪者此固秦皇之所不能驚而項藉之所不能怒也同

人上壽百歲中壽八十下壽六十除病瘦死喪憂患其中開口而笑者一月之中不過四五且而已矣莊子盜跖

登斯樓也則有去國懷鄉憂讒懼譏滿目蕭然感極而悲者矣范文正公岳陽樓記

勾踐之困於會稽而歸臣妾於吳者三年不劬蘇東坡留侯論

夫天下未嘗無賢者蓋有有臣而無君者矣威公在焉而曰天下不復有管仲者吾不信也蘇老泉管仲論

六「者」が事物の全體又は一部を表はす場合。

嗟夫予嘗求古仁人之心或異二者之為何哉范文正公岳陽樓記

道可道非常道名可名非常名……此兩者同出而異名同謂之玄玄之又玄衆妙之門。老子上

視之不見名曰夷聽之不聞名曰希搏之不得名曰微此三者不可致詰故混而爲一。同

七者が事物その物を表はす場合

何謂真。客曰真者精誠之至也不精不誠不能動人。莊子漁夫

淮陰侯韓信者淮陰之人也。史記淮陰侯列傳

性也者與生俱生也情也者接於物而生也。韓愈原性

堯不慈舜不孝禹偏枯湯放其主武王伐紂文王拘羑里此六子者世之所高也孰論之皆以利惑其真而強反其情性。莊子盜跖

智伯曰破趙而三分其地又封二子者各萬家之縣一則吾所得者少。韓非子十過

周公乃成其不中之戲以地以人與小弱弟者爲之主其得爲聖乎。柳子厚桐葉封弟辯

これら皆事物そのものを表はすのであるがいの様に題目語となる場合には「者」を「は」と讀む習慣がある。併し「者」が「は」の意味なのではない。「者」はなくても「は」を添へ

て讀むのである。「者」は唯事物の概念の形式的意義を明確にするだけであることはこの場合と同じである。

八者が「何々」といふ或は「何々」とあるといふ意の有る語の下へ用ゐられる場合。

亡徵者非曰必亡言其可亡也。韓非子亡徵

敢問或曰放者何謂也。孟子萬章

故憂愁幽思而作離騷。離騷者猶離憂也。史記屈原列傳

居下位不以賢事不肖者伯夷也五就湯五就桀者伊尹也不惡汙君不辭小官者柳下惠也三子者不同道其趨一也。一者何也曰仁也君子亦仁而已矣何必同。孟子告子下

詩云瞻彼淇澳菴竹猗猗有斐君子如切如磋如琢如磨瑟兮僖兮惻兮忼兮喧兮有斐君子終不可諠兮如切如磋者道學也如琢如磨者自修也瑟兮僖兮者恂慄也赫兮喧兮者威儀也有斐君子終不可諠者道盛德至善民之不能忘也。大學

孔子對曰有顏回者好學不遷怒不貳過。論語雍也

寡人之寶與王異吾臣有檀子ト云者使守南城楚不敢爲寇泗上十二諸侯皆來朝有盼子ト云者使守高唐趙人不敢東漁於河有黔夫ト云者使守徐州則燕人祭北門趙人祭西門有種首ト云者使備盜賊道不拾遺此四臣者將照千里豈特十二乘哉十八史略

天下有大勇者卒然臨之而不驚無故加之而不怒此其所挾持者甚大而其志甚遠也蘇東坡留侯論

夫子房受書於圯土之老人也其事甚怪然亦安知其非秦之世有隱君子ト云者出而試之同

いのようなのは上の語を「何々」とはと読んで「者」を讀まない習慣である。「とはは」といふはの意だ。④の様なのは上の語に「といふ」或は「なる」を添へて「何々」といふ者「何々なる者」と讀む習慣だ。何々といふはと讀むと「者」の上が模型動詞である様に聞えるが漢文の右の様なのは決して模型動詞でなくて模型名詞である。「といふ」と讀むのは唯その模型であることを示す爲である。左の例は作用を表はすのではなくて作用の結果を表は

すのである。又「者」の方にも「いふ」の意は無いのである。然るに「者」が右の例の様に模型名詞の下へ用ゐられると「者」に「いふ」の意が有る様に見える。それから日本人が誤解して「者」を「てへり」を讀む習慣が出来吾妻鏡三代格などの様な本では「者」を皆「てへり」と讀んでゐる。「てへり」は「といへり」の約音だ。

九者が「時場合」を指す場合

陳力就列不能者止危而不持顛而不扶則將焉用彼相矣論語季子

今漢王復興兵而東侵人之分奪人之地已破三秦引兵出關收諸侯之兵以東擊楚其意非盡吞天下者不休其不知厭足如是甚也史記淮陰侯列傳

夫子之得邦家者所謂立之斯立道之斯行綏之斯來動之斯和論語子張

子曰吾之於人誰毀誰譽如有所譽者其有所試矣同衛靈公

若不得者則大憂以懼莊子至樂

若告我以人事者不過此矣同盜跖

眞在內者神動於外同漁夫

こゝにいふ「者」は時或は場合の意である。されば上の語へ「ば」を添へて「者」を讀まない

例になつてゐる。又「者」を「ば」と讀む人もある。例へば「不能者」を「能はざれば」と讀む。「能はざるときは」と讀む方が善かつたのである。「者」は「場合」といふ意の名詞であつて「ば」ではなからぬ。

又「何者」は「何となれば」と讀む習慣である。

千金之子不死於盜賊。何者其身可愛而盜賊之不足以死也。蘇東坡留侯論

當此之時雖無袁盎錯亦未免于禍。何者己欲居守而使入主自將以情而言天子固已難之矣。同龍錯論

文公死諸侯不敢叛。晉、晉襲文公之餘威猶得爲諸侯之盟主者百餘年。何者其君雖不肖而尙有老成人焉。蘇老泉管仲論

この「何者」は「何ぞや」とある場合の意である。「何」が模型動詞なのである。「何となれば」と讀むものには「何則」が有る。「何」だけでもそう讀む場合がある。皆模型動詞である。

十「者」が時を指す場合

客曰、今者薄暮舉網得魚、巨口細鱗狀如松江之鱸。蘇東坡赤壁賦

昔者黃帝在位百年、年百一十歲。韓愈論佛骨表

近者、閣下從事李協律、翔至京師。同代張籍與李浙東書

須賈待門下、持車良久、問門下曰、范叔不出何也。門下曰、無范叔。須賈曰、鄉者與我載而入者也。史記范雎列傳

「今者昔者」を「今は昔は」と讀むのは惡訓だ。訓讀ならば「者」は讀まない方が善い。寧ろ音讀の方がましだ。

「等」等は二個以上の事物の形式的概念を表はすものである。そうして其の實質的概念はその上の名詞に由つて補給される。そうしてその用法に二種ある。一は例示された事物群の形式的概念を表はす。「韓信等」「張良等」「金銀等」「牛馬等」などの様に使ふ。「韓信等」は「韓信」に由つて例示された諸人を表はし、「牛馬等」は「牛馬」に由つて例示された諸動物を表はすのである。これは複數とは違ふ。「韓信等」と云へば「韓信が澤山有るのではなくて韓信及び類似の諸人を指すのである。同じ物が澤山有るのでなければ複數ではない。「等」はもと「等しい」といふ意の形容動詞である。それが轉じて形式名詞となつたのだ。「韓信等」は「韓信及び之に等しいもの」と

いふ意味からいふのである。

「等」の日本讀は「ら」とうである。其の區別は

1 人格を表はす場合は單詞へ附いても連詞へ附いても「ら」と讀む。「韓信ら」「張良ら」「孫子、吳子、吳子ら」「ら」には人格がある。

2 人格を表はさない場合は單詞へ附いても連詞へ附いても「ら」とうである。動植物等「金銀等」人等を表はす名詞へ附いても人格に重きを置かなければ「ら」と讀む。「孫子、吳子等」「清正、正則等」「ら」とうには人格がない。

二は複數を表はす。「我等」「汝等」「此等」「彼等」「是等」「臣等」「妾等」「商人等」「士卒等」などの類である。「我等」の「等」は複數人の形式的概念で「我」は複數人の實質的概念である。この場合「等」は複數である。勿論唯形式的概念であるから單に複數の記號である様に見えるが、日本語の「ら」といふ助辭とは違ひ、記號ではなくて實際の複數名詞である。そうして「我」も亦複數である。元來「我」といふ代名詞は單複數に通ずるものであるが「等」の上に用ゐられた場合には複數になるのである。

此の用法に於ては「等」は主として人を表はす名詞へ附く。「我等」「汝等」「商人等」など皆

そうだ。唯位置の代名詞「此」「彼」「是」「斯」へ附いた時だけは必しも人を表はすと限らな

ら。

此の用法に於ては日本讀は必ず「ら」である。元來「等」は等しいといふ意があるので「韓信等」は韓信及び之に等しい人である。これは例示であつて複數ではない。然るに「臣等」などになると最初「臣」たる我及び臣たる我に等しい人といふ意で例示であつたのであるが「臣」たる我に等しい人が矢張臣である場合には「臣等」の臣が臣たる我一人のみならず臣たる他人をも含むこととなる。そうなると複數である。「吾濟」「汝輩」「吾曹」「仲尼之徒」などいふ「濟輩」「曹徒」などは本名詞の中の相對名詞であつて形式名詞ではない。

與、及、暨 「與」「及」「暨」の三つは他物と一處に考へられた事物概念の形式的意義を表はすものである。「山與河」「親族及朋友」などの様に二名詞の間に用ゐられて二名詞と自己との全體が一つの連詞的名詞になる。世の人は之を接續詞と稱する様であるが、私は接續詞ではないと思ふ。單に二名詞を接續する詞といふ意味で云ふ

ならば差支もないがそういふ一品詞だと思ふならば誤である。
「與及暨」は本來は所謂前置詞であつて次の様に使ふ。

我昨夜與朋友賞月我昨夜及朋友賞月

「與」は「與に」の意で名詞(朋友)を客語とし之を統率して共に一つの連詞的副詞與朋友を成した上て下の動詞賞を修飾するものである。この用法では意味が客語へ歸著する所の一種の形式副詞である。此の客語を取る性質を歸著性といふ。此の用法から一轉して名詞となり歸著性だけ元の通りであるのが「山與河」などいふ時の「與」である。「山與河」の「與」は下の名詞「河」を客語として之に對して歸著語を成してゐることは副詞たる場合と變りはない。併し副詞ではなくて名詞である。意義が形式的であるから上の「山」を實質語にし之に對して自分が形式語となり「山」と「與」と兩方で實質的意義と形式的意義とを表はすのである。

□これは日本語の研究から分つたのである。日本語では「何々と何々に」といふ詞は「子供が友達と遊ぶ」本を友達に貸すなどの様に多くの場合に動詞に對して客語を成すものであるがそれが名詞に對して客語になる場合がある。

日本酒と麥酒を飲む。

この子は英語に數學が善く出来る。

「日本酒」とは「麥酒」に對する客語、英語には「數學」に對する客語である。名詞に對して客語になつて居るが名詞の表はす概念其自身に對してではない。名詞の意義の運用に對して客語なのである。どういふ運用かと云へば「麥酒數學」といふ概念は其れ一つ考へられたのではなくて、何か他にまう一つ概念が有つて、其の概念へ附け加へるとしての取扱方のもとに考へられてゐる。この附け加へるといふ運用は「日本酒英語」に向つて働く運用である。「麥酒其の物は日本酒」に對して何の關係もない。唯「麥酒」といふ概念の附け加へ先^キ仕向先が「日本酒」なのである。「日本酒」といふ客語はその附け加へるといふ運用に對して客語になるのである。

そこで右の例の「麥酒數學」にはその概念に二つの方面が有る。一つは概念の實體で一つはその運用である。日本語では「麥酒」或は「數學」といふ名詞が實體と運用とを兼ね表はして居るが、漢文では

麥酒與日本酒

といふと、概念の實體は「麥酒」數學なる名詞が表はし、その運用の方は「與」及「といふ」形式名詞が表はす。「麥酒」も名詞であり「與」も名詞であつてこの二者は同一物の二面即ち同一概念の異つた二方面を表はすのである。「麥酒與」は一つの名詞であつて「麥酒者」と云つた様なものである。唯者には歸著性が無いが「與」は歸著性が有るから客語を以てその歸著性を充實させなければ意義が具備しない。客語「日本酒」を加へて「麥酒與日本酒」と云へば意味が具備する。「及」にしても同様である。古人が訓點を附けて「麥酒與日本酒」と云ふ様に「と」を「日本酒」から戻つて讀む様にしたのは大に意味の有ることである。古人は「與」の下の名詞に對する歸著性を十分了解して居つたのである。そうでないならば「麥酒與日本酒」と戻らずに讀む筈である。特に「麥酒與日本酒」と戻つて讀んだのを輕しく看過してはならない。

「與」の上に「之」が有つて

帝之與王其號雖殊其所以爲聖一也

などの様になることが有る。この場合の「與」は用法が前の「與」と違ふ。前の「與」は「帝與王」といふ様に二事物を表はすのであるが「帝之與王」は二事物を表はすのではなく二事物の關係を表はすのである。これは從來「帝と王」とも讀み「帝の王」とも讀んでゐるが、その訓は善くない。「帝と王」とは意味が違ふし、「帝の王」とは語を成し憎い。「帝の王に與ける」と讀むべきである。(第八節參考)

「及は及び」と讀むがこれは意譯である。意義から言へば「與」は上下の二事物が對等であつて「及」は上が重く下が輕いが、文法上の性質は「與」も「及」も同一である。「暨」は極古く尙書などに用ゐられたものである。

仁與義爲定名道與德爲虛位。 韓愈原道

於是携酒與肴復遊於赤壁之下。 蘇東坡後赤壁賦

苟非吾之所有雖一毫而莫取惟江上之清風與山間之明月。 同前赤壁賦

皆以其物獻華陽夫人因言子楚賢智結諸侯資客偏天下常曰楚也以夫人爲天

日夜泣思太子及夫人夫人大喜。 史記呂不韋列傳

乃因涕泣曰妾幸得充後宮不幸無子願得子楚立以爲適嗣以託妾身安國君許

之乃與夫人刻玉符約以爲適嗣安國君及夫人因厚餽遺子楚。 同

城爲諫議大夫已五年後又二年始廷論陸贄及沮斐延齡作相欲裂其麻纒兩事耳。歐陽修上范司諫書

事末利及怠而貧者舉以爲收斂。史記商君列傳

帝曰咨汝義暨利替三百有六旬有六日以閏月定四時成歲。尙馬堯典

右の——は實質語で・は形式名詞、下の——はその客語である。「及」の最後の二例に在つては——と——が動詞性名詞だ。

寄生形式名詞

寄生形式名詞は自己の補充語としてでない他語に寄生して自己の形式的意義を實質化する形式名詞である。例へば「花春翫之、月秋賞之」の「之」は形式名詞である。「之」そのものは何等の實質的意義は無いが、「之」に對する專屬の補充語は何處にもない。「翫之」は花を翫ぶのであつて、「之」は上の「花」に由つて意義が實質化されるが、「花」は本來「春翫之」に對する題目語であつて、「之」の補充語ではない。それを「之」が勝手に利用して自己の補充語にするのである。こういうのを寄生といふ。

寄生形式名詞には「之」焉諸の三つがある。

「之」の用法は二種有る。

一 前言又は後言を指す用法、これは寄生形式名詞としての本性のまゝに用ゐるものである。

1 詩云經始靈臺。經之。營之。庶民攻之。不日成之。孟子梁惠王

孟子見梁惠王出語人曰望之。不似人君。就之。而不見。所畏焉。同

物必先腐也而後蟲生之。人必先疑也而後讒入之。蘇東坡范增論

族秦者秦也非天下也……秦人不暇自哀而後人哀之。後人哀之而不鑑之。亦使

後人而復哀後人也。杜牧阿房宮賦

2 吾聞之。新沐者必彈冠。新浴者必振衣。屈平漁夫辭

吾聞之。周生曰舜目蓋重瞳子。史記項羽本紀贊

(1)は前言を指し(2)は後言を指す。

右の例の「之」を「此」是に易へたらば何うであらうか。意義は分つても非常に具合の悪い文になる。それは何故であるかといふと「此」是は代名詞であつて實質的意義

が有るから非常に煩はしく感ずる。試に日本語の例を引いて見ると、貴方は詩を作りませるか」と問はれた場合の答に「詩は私は其れを作りませんと云つたら言ふものも聞くものも煩はしく思ふてあらう。必ず詩は作りませんと答へて其れを云はない。然らば漢文で「君作詩否」の答に「詩吾不作此」と云つては煩はしい。日本流に云へば「詩吾不作」で善い譯だが、困ることには漢文の動詞は活用もなく自他動の別も不明確なものが多く、多くの場合に客語を要する。客語が有れば客語との關係に由つて動詞の意義が明確になる。併し客語に本名詞や代名詞を使つては煩はしい。そこで單に形式的に客語の位置を填めるだけであつて代名詞の様に再び實質的概念を意識させる煩はしさを免れる詞が必要になつて來る。「之」といふ形式名詞は此の要求を充すために發達したものでなければならぬ。「詩吾不之作」と云へば實に上述の目的に叶ふのである。

「之」は代名詞でなくて形式名詞である。日本語にはそういふ形式名詞がないから「之」を代名詞に直して「これ」と訓じたのである。併し今日英語などの形容詞の比較級を譯して「より善し」「より近し」などいふ流儀で行けば「之を」を「だけ」を動詞の頭へ

附けて「詩吾不之作」を「詩は私は、を作らない」といふのであらう。

「之」は「之を」に「といふ様に客語になるだけで主語になることは無い。

二前項の用法では「之」が前言又は後言へ寄生してゐるが、こゝに又寄生すべき前言も後言もない場合がある。

知之者不如好之者、好之者不如樂之者。論語雍也

子曰我非生而知之者、好古敏以求之者也。同述而

子曰民可使由之、不可使知之。同泰伯

「知之」の「之」は何でも構はないのである。學問でも禮でも音樂でも善い。要するに其の知る所のものを指すのである。「人之於藝也、知之者不如好之者」と云へば「之」は上の「藝」に寄生するが、上の語がなければ何でも構はない適當なものを指すことになる。この用法を寄生形式名詞の非寄生態といふ。

焉「焉」はやはり「これ」と訓ずる。「之」に近いものであるが、「之」よりもその内包に對する注意が淺い。取り除いても意味が十分解る位な時に用ゐる。唯前位に在る動詞がその性質上客語(所謂補語)がなければ語の納まりが附かない様な時に客

語としての空位を填めるために使ふのである。

昔者大王居邠狄人侵之去之岐之下居焉非擇而取之不得已也。 孟子梁惠王

昔者大王居邠狄人侵之事之以皮幣不得免焉事之以犬馬不得免焉事之以珠玉不得免焉。 同

指山而問焉曰山乎曰山可也山有草木禽獸皆舉之矣指山之一草而問焉曰山乎曰山則不可。 韓愈原人

晉國天下莫強焉叟之所知也。 孟子梁惠王

子焉而不父其父臣焉而不君其君民焉而不事其事。 韓愈原道

「之岐山之下居此」と云つては既に岐山之下といふことが分つて居るのに「此れ」と云ふから岐山の下に行きて其の場所に居る」と云つた様に「此れ」が餘り重過ぎる。「岐山の下へ行つて居つた」だけで善い譯だが「居」といふ動詞が客語を要する動詞であるから餘り意義の内包に重きを置かない語を使ふ必要がある。それは「之」と「焉」であるが「之」よりも「焉」の方が内包的意義が浅い。そこで「焉」を使ふのである。「莫強焉」の「焉」も同様に「これ」といふ意義の内包は甚だ浅い。「強」が唯の「強」でなくて所謂「よ

り強き」の意で比較態であつて其の客語を要するから客語としての地位を填めるだけである。

「焉」は「忽焉」などの様に「然」と通ずる場合もあるが「焉ぞ」安ぞなどの様に「安」と通ずる場合がある。「然」は代動詞で「安ぞ」は不定副詞で「焉」は形式名詞であるが語源は同一であらうと思ふ。

「焉」は動詞の上に在れば「焉ぞ」と讀んで不定副詞であるが動詞の下に在れば大抵「これ」とよんで形式名詞である。又斷句末や連用語の下に在つて語勢を揚げるものは感動詞の一種で「哉矣也」などの一類である。(第六節)

諸「諸」は多くの場合は複性詞であつて「之於之乎」の約音であることは第壹頁に説いたが單に「之」と同様に用ゐる場合もある。

イ 子曰賜也始可與言詩已矣告諸往而知來者。 論語學而

駒伯曰待諸乎。 左傳宣十二

ロ 夫子之求之也其諸異乎人之求之與。 論語學而

(ハ)は形式名詞で(ロ)は副詞である。

第三節 動詞の小分

動詞の四種

名詞に本名詞、代名詞、不定名詞、形式名詞の四種が有る様に、動詞にも本動詞、代動詞、不定動詞、形式動詞の四種が有る。

本動詞 本動詞は直接に作用を表示する動詞であつて、變動しない一定した實質的意義を有するものである。「知忘泣笑善惡遠近」の類多數の動詞は大抵本動詞である。孔子が用ゐても孟子が用ゐても誰が用ゐても「知忘」の實質的意義に變りはない。

代動詞 代動詞は或る基準との關係に由つて作用を指示的に間接に表示するもので、その指示に由つて實質的意義が變動する動詞である。これは單詞的動詞には「然爾唯俞諾否」等有るだけである。連詞ならば「如此如彼如是」などがある。

「然」は代名詞に比較して言へば位置代名詞の中稱「是」に比すべきものである。日本

では「しかり」と讀むが日本の「しかり」は中稱ではなくて第二近稱である。

「然」は多くの場合に於て主語を取らない。それは「然」は事柄を指示する詞であつて其の指された事柄は主體と作用とを備へて居り、その主體と作用とを備へてゐるものを一括して一概念化し之を「然」と指すのであるから、主語を取らなくても主體の觀念は内部に含まれてゐるのである。例へば

1 子張曰書云高宗諒陰三年不言何謂也子曰何必高宗古之人皆然君薨百官總己以聽於冢宰三年。 論語憲問

2 子曰賜也女以予爲多學而識之者與對曰然。 同衛靈公

の(1)の「然」は自己の内部に主體を含んでゐないが、(2)の「然」は「然」といふ詞の中に主體も作用も含んでゐる。(1)には主語○○が有るが(2)には主語が要らない。主語を取るとは、動詞の必要條件ではない。

「然が然らば然るに然れども」などいふ意義を持つてゐる時には世間の人は接續詞だといふであらう。併し其れは誤である。今

傳曰古之欲明明德於天下者先治其國欲治其國者……先誠其意然(如傳所

惡。是何言也。齊人無以仁義與。王言者豈以仁義爲不美也。其心曰。是何足與言仁義也。云爾。則不敬莫大乎是。 孟子公孫丑

「唯諾」は應答にのみ使ふ。意味から言へば「はい」といふ位なものだ。併し感動詞ではなくて動詞である證據には上へ副詞を置くことが有る。

子曰。若聖與仁。則吾豈敢抑爲之。不厭誨之。不倦。則可謂云爾已矣。公西華曰。正唯弟子不能學也。 論語述而

子曰。參乎。吾道一以貫之。曾子曰。唯。子出。門人問曰。何謂也。曾子曰。夫子之道。忠恕而已矣。 同里仁

禹曰。都帝。慎乃在位。帝曰。兪。禹曰。安汝止。帝曰。吁。臣哉。鄰哉。禹曰。兪。帝曰。臣作朕股肱耳目。 虞書益稷

陽貨……謂孔子曰。來予與爾言。曰。懷其實而迷其國。可謂仁乎。曰。不可。好從事而亟失時。可謂知乎。曰。不可。日月逝矣。歲不我與。孔子曰。諾。吾將仕矣。 論語陽貨

「兪」はごく古くのみ用ゐられた。
不定動詞 不定動詞は實質的意義の定らない動詞である。單詞には「何」「孰」「奈」

如などがある。

鈞。是人也。或爲大人。或爲小人。何也。 孟子告子

公之視廉將軍。孰與秦王。 史記廉頗列傳

今我民罔欲喪。曰。天曷不降威。大命不摯。今王其如台。 商書西伯戡黎

形式動詞 形式動詞は形式的意義だけ有つて實質的意義の缺けて居る動詞である。例へば

ある。例へば

丘之所以說我者。若告我以鬼事。則我不能知也。 莊子盜跖

昭乎。日月不足爲明。率乎泰山不足爲高。巍乎天地不足爲容。 韓愈伯夷頌

秦隴山南皆被侵略。 歐陽修送田畫秀才序

不尙賢。使民不爭。不貴難得之貨。使民不爲盜。不見可欲。使心不亂。 老子上

の・の様なものがそうだ。實質的意義が缺けてゐるから其れは何等かの方法に依つて補はれなければならない。右の・は皆に依つて補はれてゐる。この・を形式動詞の補充語といふ。形式動詞の方を主にして言へば補充語に由つて其の意義を補ふのであるが、補充語の方を主にして言へば其の語の運用を助ける爲に

形式動詞を附加するとも云へる。西洋文典は後の方の見方をして形式動詞を助動詞 (Auxiliary verb) と名づけてゐる。補助の動詞といふ意味である。can, may, will, must, do の類がそうだ。日本文典では「助動詞」の意義を誤解(或は曲解)して「動詞を助ける詞」としたりけりらるしむの類を助動詞と名づけてゐる。これらは活用性の助辭であつて一つの動詞ではないから形式動詞ではない。漢文の形式動詞はそんな類とは違ふ。

本動詞の小分

動作動詞と形容動詞

動詞は作用を敘述する詞である。作用は或る主體から發生するものであつて、獨立の現象として認識し得られるものである。事物や屬性は獨立の現象ではないが作用は獨立である。例へば「花」は事物であるが、其の作用を考へずに單に事物として「花」だけ考へたならば獨立の具體的の一現象ではない。ある現象の主體或は

客體を抽象的に考へたまでゝある。然るに「開」は一つの作用であつて獨立の一現象である。勿論「開」だけでは何が開くかその主體は分らないが、既に「開」といふ以上その何物かが開くのであつてその主體の概念の形式的意義だけは「開」の中に含まれてゐる。其れ故其れへ主體の實質的概念を附加して「花開」と云へば其の獨立性が明瞭になる。そうして「開」も作用であるが「花開」も作用である。唯「開」は主體の概念を缺いて居る半概念であり「花開」は主體の概念を缺いて居ない全概念であるといふ差だけである。「開」も「花開」も「窓戸開」も「梅開」も「開」には相違ない。「花」は「花」であつて「開」ではないが「花開」は「開」であつて「花」ではない。

獨立の一現象とは吾人の判斷に於て統一された現象をいふのである。「花」は唯事物であるだけでは判斷されてゐない。「花開」に至つては或る現象が「花開く」と斷定されたのであるから判斷に於て其の場合の現象の觀念と「花開」といふ概念とが同一意識内に統一されてゐる。

動詞は其の概念に必ず判斷を下す性質即ち判定性がある。この判定性が言語に表はれれば敘述性といふ。故に動詞は必ず敘述性を持つてゐる。動詞の表はす

概念は作用の概念である。作用の概念とは内包的であつて且つ判定性を持つものをいふのである。

作用を分けて動作と状態との二つとする。そうして動作を表はす動詞を動作動詞とし状態を表はす動詞を形容動詞略して形容詞とする。

動作と状態との別は動と静との別ではない。何となれば動作の中にも動かない動作が有るからである。動作と状態とは、もつと根本的な相違がある。日本語の動詞の活用英語の動詞の法漢文の動詞の副詞的用法等を考へて見ても決して動と静とを動作状態の別としてゐない。

吾々が作用を認識するには時間の形式に由ることゝ由らないこととある。前者が動作で後者が状態である。動作と状態との別は認識のしかたに在る。

「往く来る捨ふ捨てる讀む書く」などは時間に於ける變化であり「在り居る」などは時間には於ける不變化である。變化でも不變化でも時間の中に於て行はれる作用である。こういうものを動作と云ひ之を表はす動詞を動作動詞といふ。そうして前者「往く来る」の類は運動的動作で後者「在り居る」の類は靜止的動作である。運動

的でも靜止的でも何方でも動作を表はす動詞は之を動作動詞といふ

「善惡遠近白黒」等は時間に關係なく考へられた作用である。こういう作用を状態と云ひその動詞を形容動詞又は形容詞といふ。

此等の状態もその考へ方を變へて之を時間中に於ける不變化として考へることは出来る。その場合には變じて靜止的動作となるから、その動詞は形容動詞でなくて靜止的動作動詞である。「善惡遠近」等が状態であるか靜止的動作であるかは漢文では明瞭でない場合があるが日本語や英語では常に明別がある。英語では good, bad の類は常に状態であつて靜止的動作の場合には前へ be, am, are, is を附けた連詞的動詞に由つて表はされる。

日本語では活用があつて活用が状態か靜止的動作か其の考へ方を示す。「善し悪し」は常に状態で「善かり悪しかり」は常に靜止的動作である。詳しく言へば四段活上下一二段活、ナラサカ行變格及び之に準ずべき活用はそれが動作動詞であることを示し、ク活、シク活、ニ活、ト活及び之に準ずべき活用はそれが形容動詞であることを示す。そうして形容動詞が靜止的の動作動詞に變ずる場合には活用がラ行

變格に變る。

形容動詞

動作動詞(靜止的)

善	惡	遠	近	遙	微	靜	徐	堂々	轟々	忽然	窈窕
ク	ク	ク	シ	キ	ケレ	(ク活)……カラ	カリ	カリ	カル	カレ	(ラ行變格)
ニ	〇	〇	〇	〇	(ニ活)……ナラ	ナリ	ナリ	ナル	ナレ	(ラ行變格)	
ト	〇	〇	〇	〇	(ト活)……タラ	タリ	タリ	タル	タレ	(ラ行變格)	

形容動詞の若干はその第二活段には副詞に類する用法がある。例へば、

- 「善く文を作る」 「善く作文
- 「近く目前に在り」 「近在目前
- 「遠く望めば雲の如し」 「遠望如雲

「遙に海を望む」

「遙望海」

「微に聲有り」

「微有聲」

「徐に形勢を窺ふ」

「徐窺形勢」

「諄々と諭す」

「諄々諭之」

「轟々と雷の如し」

「轟々如雷」

の「」はそらだ。(英語では「」を附ければ副詞的用法を成す。)そうして靜止的動作動詞の方は第二活段にそんな用法がない。その代り、「善からむ」(未來)、「善からしむ」(使動)、「善かりき」(過去)、「善かるべし」(可然)、「善かれ」(命令)等の用法がある。これは形容動詞の方にはなす。

漢文でも「善」「惡」「遠」「近」等が形容動詞たる場合には副詞的用法のあるものがある。右の例の下段の漢文の通りである。又此等が

人皆欲其行之善

其行須善

などの様に未來態、可然態などに用ゐられた場合は靜止的動作動詞である。併し

其言甚善

其聲轟然

などは日本語の読み方は「善し」形容動詞、「轟然たり」靜止的動作動詞であつて「善かり」(靜止的動作動詞)「おどろくし」(形容動詞)ではないが漢文としては果して何れに屬するものか明白でない。蓋しその語を用ゐる人の心持が何れに在るかに由つて定まるもので文字の外形に由つてはどちらとも定められないのである。

こゝにいふ風に漢文では形容動詞か靜止的動作動詞か分らない様な場合がある。併しそれは必しも差支はない。何れにしても「善」惡「遙」微「轟然」等の諸詞は主語を取つて「文章最善」其爲人甚惡「雲遙」聲微「砲聲轟然」などの様に敘述語となることが出来るから敘述性の有ることは明瞭だ。

内包的意義を表はし且つ敘述性の有る詞が動詞なのである。「善作文の」善、「遙望海の」遙などの様に用ゐられても其れは形容動詞の副詞的用法であつて副詞ではない。副詞は敘述性の無い詞である。「頗寧曾未抑若」等がそうだ。

日本語で動作動詞として用ゐる漢字でも漢文では形容動詞なのがある。例へば

「富は日本語では」とむと讀んで動作動詞だが漢文では「貧し」と同様形容動詞だ。又反對に「無は日本語で無し」と讀んで形容動詞だが漢文では「有」と同様動作動詞だ。

形容詞と形容動詞 日本文典に所謂形容詞は「善し」惡し「久し」烈しの類で状態を表はす動詞だ。動詞の一種である。之を形容動詞といふのである。状態動詞と云つても善い譯である。其れだから私のいふ形容動詞は即ち形容詞である。然るに近頃の多數の文法書は形容詞を一つの品詞として動詞と別のものとしてゐる。そゝいふ人は

古之欲明・明德於天下者先治其國。欲治其國者先齊其家。欲齊其家者先修其身。欲修其身者先正其心。欲正其心者先誠其意。欲誠其意者先致其知。致知在格物。物格而後知致。知致而後意誠。意誠而後心正。心正而後身修。身修而後家齊。家齊而後國治。國治而後天下平。大學

の・を動詞とし。を形容詞として別々の品詞とするに相違ない。私は右の例の・とは同一品詞の自動と他動とであると思ふ。之を別々の品詞とすることは誠に約らないことと思ふ。「齊其家の」齊が他動であるのに對して「家齊の」齊が自

動である様に、同じ比で「正其心の」正が他動、「心正の」正が自動であると思ふ。數學的に比例式に表はせば

齊其家：家齊 = 正其心：心正

であると思ふ。「齊其家」家齊の「齊は何れも同じ品詞であるのに」「正其心」心正の「正」は品詞が違ふといふことは不合理だと思ふ。

動作動詞と形容動詞とは小異はあつても断句を構成する上に於て其の効力は同じである。其れが敘述語となつて主語に對し、修用語となつて修飾される語に對し、歸著語となつて客語に對する點に於て全く變りはない。これを別々の品詞とすることは意義が無いと思ふ。

形容詞といふ語は元來英語 Adjective の譯語であつて名詞の上に附けられる非敘述性の内包的詞である。其の語義は名詞を形容 (modify) する詞といふ意であつて形容とは修飾の意である。其れを國文家が誤解して形容を状態の意とし舊來の形狀言を改名して形容詞と云つた。そこで形容詞といふ語は國文家と英文家と異なる意に用ゐることとなつた。私は出来れば形容詞といふ語を用ゐたくない

と思ふ。國文家のいふ様な形容詞は形容動詞と云ひ、英文家の云ふ様な形容詞は副體詞と云はうと思ふ。

英文典に所謂形容詞 (Adjective) も實は二種ある。一を限定形容詞 (Limiting adjective) と云ひ、一を性質形容詞 (Qualifying adjective) と云ふ。前者は冠詞 (a, the) 指示形容詞 (this, all, some 等) 數詞の三種で何れも意義が超程度的に決定されたものであつて比較法の無いものである。一は「善」惡「遠」近等の類で程度の意義を有し比較法の有るものである。前者は眞の「副體詞」であつて其の用法は名詞の上に從屬するだけである。後者は實は形容動詞であつて副體詞ではない。併し英語などでは主語を取ることなく且つ終止法がないから副體詞と誤解されたのである。

所謂性質形容詞が副體詞でない證據は This flower is white などの様に動詞の補語 (Complement) となることである。限定形容詞にはこんな用法はない。唯性質形容詞は主語を取らない。併しそれは主語の觀念が含まれて仕舞ふからで日本語の「飛ぶ鳥」行く人などの「飛ぶ」行くが主語を取らないのと同理である。「白い紙」は「色が白い紙」であるが英語の white は「色が」といふ觀念を含んでゐることは日本語の「白」

と同じである。動詞には日本語の「然り」ラ行變格の如く漢文の「有客問曰……」の「有」などの如く主語を取らないものが有るから、主語を取るとは動詞の必要條件ではない。主語がなくても敘述性があれば動詞である。又性質形容詞は終止法がないが終止法も動詞の必要條件ではない。日本語の「そんなはそんなら」とはなるが終止法はない。漢文の「微禹我其魚乎」の「微」は動詞であるが終止法は殆どない。形容動詞といふ語は大槻文彦博士の造語である。博士は日本の形容詞は文末を結ぶから動詞の一種として形容動詞と云ふべきものであらうが姑く形容詞と名づけると廣日本文典別記に斷つた。後芳賀矢一博士も此の語を用ゐたが意味が少し違ふ。芳賀博士は「善し悪し」の類を形容詞とし「善かり悪かり静なり室々たり」の類を形容動詞とした。私は形容動詞といふ語を大槻博士と同じ様に用ゐたいと思ふ。

記號動詞、象形動詞と模型動詞

本動詞は又記號動詞、象形動詞、模型動詞の三種に分たれる。

記號動詞 記號動詞は聲音を單に概念の記號として用ゐた動詞である。「往來」といふ音は唯そらいふ意義の記號として人爲的に約束されてゐるだけで音と意義との間に人爲的以外何等の關係もない。「往」といふ音が若し別の意義に用ゐられる約束になればそれでも善いのである。

象形動詞 象形動詞は聲音又は其の意義が作用の繪畫として用ゐられた動詞である。例へば「轟々」の類だ。「轟々」は「轟々」といふ音で雷鳴や大砲などの様な烈しい音響作用を畫いた繪畫である。「轟々」といふ音そのものは音響の單なる記號ではなくて音響の畫である。それ故こらいふのを音畫といふ。音で畫いた繪畫といふ意味だ。普通の繪畫は圖形で畫くが音畫は音で畫く。音畫は其の音に由つて物の作用を畫くのであるから、其の音と作用との間に自然的の類似がある。單に人爲的約束ではない。されば記號動詞は外國人には全く意義が分らないが音畫は外國人にも多少其の氣分が味へる。其れは一方は音と意義との關係が全然人爲的であるのに、一方は自然的な點が有るからである。併し記號動詞も其

の語源に於ては音畫から出てゐるものが非常に多い。「打はうつ」の意の記號動詞であるが語源は漢文の「だ」も日本語の「うつ」も打つ音を畫いたものである。語源的に言へば「打」も音畫であるが、現在では最早語源に拘らず唯「うつ」といふ意味の記號になつてゐる。

記號的と象形的との別は文字にもある。等しく表意文字であつても「日月魚龜」などは記號文字である。「日」は單に「ひ」といふ意義の圖形的記號である。然るに蝌蚪の文字では①) 夔 夔 であつて眞の象形文字である。圖形的象形である。此の二種は均しく表意文字と稱せられる。言語に於ても動詞は皆表意的聲音であるがその表意の方法には記號的と象形的の二種がある。

漢文の記號動詞は日本の訓み方では訓で讀む場合と音で讀む場合とある。音で讀む場合には、動作ならば一字ならばサ行變格にして「位す」「禁す」「奏す」「要す」といふ風に讀み、二字ならば勉強旅行などの様に無活用のまゝで讀み、其の下へ形式動詞「す」を附ける。状態若しくは靜止的動作ならば音で讀む場合には下へ「なり」を附けて「美に」「美なり」「美麗に」「美麗なり」といふ様に讀む。

所が象形動詞の場合には違ふ。象形動詞は大抵状態を表はすものであるが、其れは音で讀んで下へ「と」「たり」を附ける。「になり」は附けない。例へば「轟々と轟々たり」「漣々と漣々たり」である。稀に動作たる場合があるがその場合には「す」を附ける。「憔悴す」「枯槁す」「躊躇す」「趑趄す」など。

象形動詞には音畫の外、意畫といふべきものがある。意畫は意義で作用を畫くのである。「轟々漣々」などは音で作用を畫いたものだが、「明々たり」「白々たり」などは意義で作用を畫いたものだ。「明」そのものは音畫ではなく記號であるが、之を二つ並べて「明々」といふのは明なる状態を畫いたのである。二つ並べるといふことが繪畫たる所以である。

象形動詞には次の様な種類がある。

一、一音のもの

- | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 儼 | 杳 | 恬 | 惘 | 恍 | 飄 | 忽 | 潛 | 澹 | 曠 |
| 湛 | 琴 | 瑟 | 赫 | 喧 | 瀆 | 兀 | 寂 | 汨 | 陶 |
| 斐 | 節 | 炳 | | | | | | | |

二、同字を重ねたもの

業々	蕩々	郁々	青々	浩々	輓々	欣々	涓々	洋々	悠々
霏々	遑々	便々	鬱々	滔々	濯々	蹻々	融々	洩々	源々
孳々	徐々	戰々	競々	囂々	遙々	堂々	啾々	濛々	岷々
惘々	欸々	淵々	井々	嚴々	遙々	厭々	樂々	炤々	修々
唯々	諾々	綏々	熙々	沌々	凜々	昂々	汜々	皓々	汶々
亭々	察々	切々	偲々	猗々	天々	藁々	斷々	赫々	穆々
織々	忿々	隱々	寂々	寥々					

三、同性の音を重ねたもの

躊躇	踟躕	踟躕	悽愴	髣髴	淋漓	趑趄	囁囁	恍惚	獻獻
含糊	留連	陸離	陵梁	猶豫	盤薄	顛倒	蕭殺	蕭散	流離
荏苒	促聾	喔呼	突梯	滑稽	慷慨	蒲服	玲瓏	參差	嘔啞
巍峨	輾轉	逼迫							

四、同韻の音を重ねたもの

逡巡	彷徨	逍遙	徘徊	幾微	遲迤	殼觶	蹢躅	盤桓	混沌
棧棧	窈窕	嬋娟	潺湲	辟易	宛轉	鮮腆	胡盧	相羊	倉忙
支離	滅裂	章皇	鬱律	仿佯	猖狂	蹉跎	纏綿	綢繆	遷延
緜緜	連綿	闌干	從容	絢爛					

五、異音或は類似の韻を重ねたもの

委蛇	滂沱	鏗鏘	跼踖	土直	團圞	砵磅	嘯呢	絡繹
----	----	----	----	----	----	----	----	----

六、下へ「然」を附けたもの

油然	蕭然	隱然	填然	嶄然	欣然	勃然	釋然	懽然	幡然
泊然	儼然	艷然	喟然	淡然	廓然	惘然	攸然	浩然	憂然
惘然	惘然	沛然	飄然	巍然	卒然	茫然	悄然	蹶然	悵然
決然	奭然	屑然	塊然	褒然	嘸然	超然	厭然		
由々然	諄々然	逐々然	恢々然	鳴々然	循々然	喞々然	芒々然	徑々然	

七、焉を附けたもの

泊焉	悖焉	華焉	眷焉	忽焉	潛焉	瞭焉	輪焉	怒焉	奐焉
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

翦焉

惴々焉 盤々焉 困々焉 數々焉 峨々焉 休々焉 洋々焉 圍々焉 斷々焉 行々焉
諄々焉

八「乎」を附けたもの

茫乎 凜乎 煥乎 悄乎 溫乎 屬乎 逸乎 浩乎 厲乎 悅乎
確乎 鬱乎 恍乎
浩々乎 飄々乎 岌々乎 洋々乎 堂々乎 蕩々乎 巍々乎 決々乎 屬々乎 洞々乎
默々乎

九「爾」を附けたもの

莞爾 撥爾 卒爾 卓爾 蹴爾 叢爾 喙爾 鏗爾
從々爾 扈々爾 縱々爾 折々爾 騷々爾 鼎々爾 猶々爾 僕々爾 慥々爾

十「如」を附けたもの

闕如 躍如 翼如 勃如 晏如 齊如 突如 來如 榮如 辱如
豁如

侃々如 閤々如 與々如 怡々如 愉々如 皦々如 行々如 申々如 天々如 訴々如
鞠躬如 踟躕如 驩虞如

十一「若」を附けたもの

自若 惕若 沃若 沛若 忙若 眴若

これら皆日本讀ては下へ次の活助辭又は形式動詞を附ける。

轟々	○	と _{シテ}	○	○	○	………	状態
卒然	○	たり _キ	○	○	○	………	靜止的動作
晏如	○	たり _キ	○	○	○	………	靜止的動作
躊躇	○	たり _キ	○	○	○	………	運動的動作
辟易	○	たり _キ	○	○	○	………	運動的動作
枯槁	○	たり _キ	○	○	○	………	運動的動作

一字のものは皆音畫である。

二字以上のものには音畫も意畫もある。

同字を重ねるものは同様の状態の繼續を畫くのである。

異字を重ねるものは多少異なる二状態が律動的に交互に入り替る様子を畫くの

である。

然字を附けるのは「然は然り」といふ意であるから「然り」といふ様子といふ意を表はすのである。「浩然は浩たるそらいふ様子を表はすのである。日本語で「がたを」「がたり」「ぐにゃを」「ぐにゃり」などいふその「り」は「有りの意で」「がたり」は「がた」といふ様子のであることを示すので「然も其れに似たものである。但しこらいふ場合の「然」は原辭であつて動詞ではない。上の字と一緒になつて一つの動詞になるのである。「焉も然」と類音で語源が同じであらうと思はれる。この「焉」は形式名詞にもなる位で、「それ」「そう」の意がある。

「爾如若は」而」と類似した音で語源は皆同じであらう。皆そらいふ様子があることを示す意がある。

模型動詞 名詞に模型名詞の有ることは前に第九頁に説いた通りである。動詞にも模型動詞が有る。模型動詞は聲音言語を材料として實際の作用たる音響や言語の模型を作り、その模型を以て實際の作用としての音響言語を表はすものである。日本語の例で説明すると

此の時時計の音が「チーン〜」。

御宮の彼方で「ワイワイ」御宮の此方で「ドンドコドン」。

子供はいきなり「駆けよつてお父さま！」。

の「チーン〜」「ワイワイ」お父さま！などがそうだ。此等は皆事物としての「チーン〜」……ではなく、作用としての「チーン〜」……だ。之を記號動詞に直せば

この時計が鳴つた。

御宮の彼方で叫ぶ。御宮の此方で鳴る。

子供はいきなり「駆けよつて呼ぶ」。

である。だから右の例の「……」は皆作用である。その語は皆動詞である。併し「チーン〜」は時計の鳴る作用それ自身ではない。人間が人間の發音でその眞似をして時計の作用を代示するだけだ。時計の發音は人間には出來ない。出來るのはその眞似(模型)だ。それだから「……」は皆模型動詞である。「お父さま」はもと名詞である。併し右の例の「お父さま！」は子供が父を呼ぶ作用の代示であるから動詞である。模型動詞である。記號動詞に改めれば「呼ぶ」である。

模型動詞は「ちーんと鳴る」お父さまと呼ぶの「ちーんとお父さま」などの様に「と」を添へて客語にして用ゐることが多い。客語であつても名詞ではない。「と」まで込めて動詞である。その格を生産格といふ。連用格の一種であつて生産性動詞に對して客語になる。「となしに使つて意味が終止すれば終止格である。漢文でも模型動詞は大抵客語にして「曰謂以爲爲」などの下へ用ゐる。

- 1 於是鳴得腐鼠鸚鵡過之仰而視之曰「嚇」 莊子秋水十二
 - 2 仁者雖告之曰「井有仁」焉其從之也 論語雍也
 - 3 或謂寡人「勿取」或謂寡人「取之」 孟子梁惠王下
 - 4 泰伯其可謂「至德」也已矣 論語泰伯
 - 5 二三子以我爲「隱」乎吾無隱乎爾 同述而
 - 6 願作「輕羅」著細腰願作「明鏡」分嬌面 唐詩選二劉延芝公行
- の「……」は模型動詞であつて日本語の「と」の意味を持つて居り上の「」の客語になつてゐる。(1)は發音作用の模型(2)は説話作用の模型(3)は命名作用の模型(4)は命名作用の模型(5)は思惟作用の模型(6)は事物の事物ぶり(作用)の模型で、何れも作用の模型である。

右の例の(4)(6)の様なのは名詞だと云ひたい人が有るであらう。其れは括弧の中は名詞である。しかし括弧の外から見れば(4)は命名作用の模型(6)は事物の事物ぶり(作用)の模型であるから動詞である。若し括弧の中から観て品詞を定めたら(1)などは詞でないたゞの聲である。其れでは何に由つて品詞別を定めようか。模型動詞と模型名詞(第2頁)とは違ふ。模型名詞は事物としての聲音言語の模型であつて作用の模型ではないから「と」の意味はない。

分主性動詞と合主性動詞

本動詞に分主性動詞と合主性動詞の二種がある。

分主性動詞 分主性動詞は作用の觀念から主體の觀念を控除して作用の觀念だけを表はす動詞である。例へば「往來開落知忘長短」其の他一般の動詞は殆ど全部そうである。さういふ動詞は皆主體の觀念が缺けて居るから、何等かの方法を以て其の主體の觀念を補給しなければ具備した觀念を表はすことが出来ない。例へば「人往我往友人來使者來花開日落」などの様に主語を加へれば其れでその主

體が分る。

合主性動詞 合主性動詞は作用の觀念から主體の觀念を控除せず主體の觀念を含んだまゝを表はす動詞である。例へば

九年春天王使南季來聘三月癸酉大雨震電庚辰大雨雪。左傳隱九

の「雨震電」などがそうだ。「雨震電」は作用であるが何の作用であるかと云ふと「雨震電」の作用である。作用の觀念の中に主體の觀念が含まれてゐる。強ひて主體の觀念を分化させれば雨が雨したのてである。震電が震電したのである。

單詞の合主性動詞は甚だ少ない。併し連詞としては合主性動詞が幾らでも出来る。分主性動詞へ主語を加へて出来た連詞は既に主體觀念を缺如してゐないから之を一の合主性動詞と見ることが出来るからである。例へば「往落」は分主性だが「人往花落」は連詞なる合主性動詞である。

分主性動詞でも合主的に用ゐる場合が有り、合主性動詞でも分主的に用ゐる場合が有る。併し其れは本性ではなくて副性であるから詞の相の問題である。第二章第二節で説くことにする。

代動詞、不定動詞は本性としては合主性、分主性の別はない。さういふものを分合主性動詞といふ。用ゐる方に由つて何れにもなるのであるが、此れも詞の相の問題である。(第二章第二節)形式動詞は「而」を除く外は本性としては凡べて分主性であるが、副性としては合主的にも用ゐられる。これら凡べて詞の相の問題である。形式動詞の「而」は合主性である。

歸著性動詞と非歸著性動詞

作用には客體の有るものと無いものとあると考へられる様だが、嚴密に言へばさういふことは無い。唯作用から客體を分けて考へた場合に客體が有ると稱し、客體を分けずに考へた場合に客體が無いと稱するだけである。

本動詞の中に「人飲酒」「人騎馬」の「飲騎」の様に、作用の中から作用の客體「花」「馬」の觀念を控除して自己は唯作用そのものゝみを表はす動詞がある。これを歸著性動詞といふ。それは作用の觀念が作用の客體「花」「馬」へ歸著するからである。この客體「花

馬を表はす語を客語といふ。

又本動詞の中には、人行鳥飛父死子哭山高雪白の行飛死哭高白などの様に、作用の概念が客體と作用とに分解されずに表はされるものがある。こゝいふのを非歸著性動詞といふ。客體の概念が存しないのであるから客語の有るべき譯はないのである。

併し動詞の歸著性非歸著性といふことは動詞の本性を言ふのである。其の運用上から言へば歸著性を非歸著性の如く取扱ひ、非歸著性を歸著性の如く取扱ふ場合が幾らもある。これが動詞の「相」の分れる所以で其の關係が甚だ複雑になつて来る。このことは第二章第二節に述べる。

代動詞、不定動詞にはその本性に歸著性、非歸著性の別が無い。形式動詞には歸著性、非歸著性の別がある。

歸著性動詞は客體の概念を除き去つた作用概念を表はすものである。然るに客體と作用との關係は種々ある。その關係の如何に由つて歸著性そのものを他動性、依據性、生産性の三種に分ける。

他動性動詞と自動性動詞

作用の觀念を分解して作用そのものと作用の材料との二概念とし材料の概念(何々をといふ概念)を控除して作用そのもの、概念のみを表はす性質の動詞を他動性動詞と云ふ。他動性動詞は歸著性動詞の一種である。そうして他動性でない動詞は歸著性であるに拘らず凡べて之を自動性動詞といふ。

自動性

1 花散

家富

舟泛

尾垂

敵軍敗

2 人死

使者往

他動性

風散花

人富其家

人泛舟

犬垂尾

我軍敗敵軍

賊殺人

主人遣使者

民事其君

君使其民

3 人笑

.....

人泣

.....

4

人讀書

.....

人飲酒

右の例の上段の太字は自動性で下段の太字は他動性である。その中(1)(2)は自他動相對するもので之を對稱的自他動といふ。(1)は同じ原辭が自他動の二様の詞となつたもの、(2)は別々の原辭から成るものである。(3)は之に對する他動が無く(4)は之に對する自動がない。之を單獨自動、單獨他動といふ。

對稱自他動とは甲の作用が自動であるのに對して、其れが甲乙二者の間に行はれた場合に其れを乙の作用と觀て甲の作用と觀ずに、之を乙の他動であるとするものである。例へば「人死」の「死」が自動であるのに對して「賊殺人」の「殺」を賊の他動とする類で、人は殺されて死ぬにしても「賊殺」は全然賊の動作であつて「人」の力は全然借りない。然るに「人笑」などは違ふ。「某以諧謔能笑人」の「笑」笑はしむが他動であつて

も此れは人の笑ふことが必要であつて某だけの動作ではないから「人笑」の「笑」に對する對稱的自他動ではない。又「我笑人」の「笑」も他動であるが、此れも「人笑」の「笑」に對する對稱的自他動ではない。此等皆單獨他動である。

世間の人は他動といふことを誤解してゐる。自他動の別を客觀的に解釋して實際の事物が他の事物を處置することの様に解釋するが、其れは文法的解釋ではない。文法上自他動といふのは概念と概念との關係上に存するものであつて物と動作との關係に存するものではない。實に概念の運用上の問題である。

文法上に所謂る他動とは他物を自己の動作の材料に取入れるとして取扱ふことである。概念のそつといふ取扱方をいふのである。「賊殺人」の「殺」は「人」を「殺」といふ動作の材料として取入れてゐるから他動なのである。「人死」は自動であつて「疾病殺人」として考へれば同じ事件でも觀る方面が違ふから「殺」は疾病の他動になる。

他動の四義 他動といふことは詳しく言ふと生産、保有、使用、處置の四種になる。例へば

- 作文
- 炊飯
- 娶妻
- 穿孔.....〔生産〕

多藝

寡慾

富人材

乏勇氣……〔保有〕

去故郷

出門

行山路

過家門……〔使用〕

飲酒

買物

娶女子

雨穿土……〔處置〕

「娶妻」の娶は既に妻であるものを再び娶るのではなく娶つて始めて妻が出来るのであるから生産即ち製造である。「娶女子」の娶は女子を妻にするのであるから處置である。

「去故郷」「出門」の類は出發點の使用である。「行山路」「過家門」「泳水」「渡水」の類は皆通過地の使用である。「自故郷去」「自門」は出發點を使用する意味はないから自動であるが「去故郷」「出門」は「故郷」「門」を出發の基準に使用するのであるから他動だ。故郷や門が動かずに人の方が動くから自動の様に思ひ易いが、實際の物の動く動かないは問題ではない。概念としては故郷も門も動かされてゐる。

子之與我至燕再三欲去我易水之上。史記蘇秦列傳

の「去」なども我を置去にする意で我は動かずに子の方が動いてゐる。

自然的他動と意志的他動 他動には右の四種に關係なく別に自然的と意思的

との別が有る。多數の他動性動詞は右の四種の何れにもせよ、大抵は意志的他動である。例へば「賊殺人」の殺は賊の意志的動作である。「風散花」の散も風の意志的他動である。風に意志が無くても花を散すことは風から観れば風の勝手な動作であつて決して花が自ら散るのではない。無生物の動作でもそういうのは假に意志が有つてする様に取扱ふのである。所が

中天懸明月。令嚴夜寂寥。杜市後出塞

燕趙古稱多感慨悲歌之士。韓愈送董邵南序

憶昔霓旌下南苑。苑中萬物生顏色。杜市哀江頭

耳得之而爲聲。目遇之而成色。蘇東坡赤壁賦

視之不見。名曰夷。聽之不聞。名曰希。老子上

の・の類は自然的他動である。「明月が中天へ懸ると云へば自動であるが自然力が明月を天へ懸けたと云へば他動である。他動でも自動と同じ意味に聞える。其れは自然の他動であるからである。凡そ自然的他動は形式だけを甲の他動にして其の目的は乙の自動を云ふに在る。「多」は多くある意義ならば自動で右の例